

日本学校教育学会 第 40 回研究大会（富山国際大学） プログラム



2026年7月25日（土）・26日（日）

会場：

【25日】パレブラン高志会館、富山県教育記念館

【26日】富山国際大学呉羽キャンパス

主催：日本学校教育学会

共催：富山国際大学

後援：富山県教育委員会、射水市教育委員会
公益財団法人富山県ひとづくり財団

協 賛：株式会社学文社、教育情報出版、株式会社文成印刷
（順不同）株式会社三恵社、パレブラン高志会館

目次

日本学校教育学会第40回研究大会の開催にあたって	2
1 研究大会のご案内	3
2 大会参加申込み、及び大会参加費の支払いについて	3
3 「自由研究発表」の発表要領	4
(1) 「自由研究発表」の発表時間について	4
(2) 発表の取止めについて	5
4 「発表要旨集録」について	5
(1) 「発表要旨集録」のダウンロードのお願い	5
(2) 発表資料の配付について	5
(3) 大会会場でのWi-Fi接続について	5
5 連絡事項	6
① シャトルバスの運行について	6
② 昼食について	7
6 各種リンクとお問い合わせ先	7
7 各会場へのアクセス	8
8 会場案内図	9
自由研究発表(25日)	14
若手・次世代ランチミーティング	21
開会行事	22
公開シンポジウム 「VUCAとは何か ―社会の未来予想図と教育の展望―」	23
情報交換会	24
自由研究発表(26日)	26
課題研究 次世代の学校教育を構想するー学びを問い直す	32
ラウンドテーブル1 高校探究学習の考え方・進め方[その3] ―高校改革と探究学習：事例校の取組に学ぶー	33
ラウンドテーブル2【実践研究委員会企画】 実践の記録を研究論文にしていくために ―実践者のための論文の書き方講座ー	40
ラウンドテーブル3 「もうちょっとできたかな」という感覚から 幼児教育と小学校教育の接続を考える	42
ラウンドテーブル4【国際交流委員会企画】 学校教育学会における国際交流の可能性	46
ラウンドテーブル5 WWL 拠点校におけるカリキュラム開発 ―実装を通じた持続可能な教育変革に向けてー	48
ラウンドテーブル6 日本語指導が必要な児童生徒の視点からとらえ直す 多様な子どもたちを包摂し、自信と意欲につなげる教科授業のあり方とは？	50

日本学校教育学会第 40 回研究大会の開催にあたって

日本学校教育学会第 40 回研究大会は、2026 年 7 月 25 日（土）26 日（日）、富山県富山市にある富山国際大学呉羽キャンパスを主会場に開催いたします。第 40 回という記念すべき本大会において、皆様を富山にお迎えできますことを大変光栄に存じます。

本学会は、学校教育に関する実践と理論の緊密化・統合を目指す学校教育の実践者と研究者によって創立された学会であり、理論と実践の往還・融合を目指した活動を特色として参りました。今大会では、自由研究発表 58 件、開会行事、公開シンポジウム、課題研究、そして 5 つのラウンドテーブルを予定しております。2 日間、さまざまな課題について議論が交わされ、より一層研究を深められる機会となりますことを願っております。

今回の研究大会は、お越しになる皆様の利便性を考慮し、2 つの会場で開催いたします。1 日目は富山駅前のパレブラン高志会館と、隣接する富山県教育記念館での開催です。自由研究発表 1-7、開会行事、公開シンポジウム、情報交換会を実施いたします。2 日目は富山国際大学呉羽キャンパスでの開催です。自由研究発表 8-13、課題研究、ラウンドテーブルを実施いたします。

学校教育を取り巻く環境が、大きく変化しています。社会情勢の不安定化、経済の混沌化、生成 AI の台頭、学校の本質と安全など、学校教育は多くの影響を受けやすい立場にあるということに気付かされます。その中で、本学会は何を研究し、何を語り、何を提唱し続けていく必要があるのでしょうか。昨年、40 周年を迎えた本学会では、記念誌として「変動社会の学校教育」（日本学校教育学会 40 周年記念誌編集委員会編、三恵社）を上梓しました。70 名に及ぶ執筆者が、教育の今日的課題に触れながら執筆した本書は、現代の学校教育に多くの示唆を与えるものとなりました。第 40 回研究大会も、本書と同様に教育の今日的課題を踏まえた上で、教育の不易と流行への思考の広がり、課題解決に向けた議論、本質を問い直す対話などが生まれる機会となることを期待してやみません。

皆様にはご不便をおかけすることもあるかもしれませんが、研究大会準備委員会一同、実り多い大会となるよう精一杯準備と運営に務めて参りますので、皆様のご理解とご協力を賜りたく存じます。どうぞよろしくお願い申し上げます。

多くの会員の皆様のご参加を心よりお待ちしております。

日本学校教育学会第 40 回研究大会（富山国際大学）
大会準備委員会委員長 湯澤 卓

1 研究大会のご案内

(1) 大会期日及び会場

【大会期日】 2026年 7月 25日(土)・26日(日)

【会場】

1日目：パレブラン高志会館、富山県教育記念館

パレブラン高志会館 〒930-0018 富山県富山市千歳町1丁目3-1

富山県教育記念館 〒930-0018 富山県富山市千歳町1丁目5-1

2日目：富山国際大学呉羽キャンパス E館、F館

富山国際大学呉羽キャンパス 〒930-0196 富山県富山市願海寺水口444

(2) 大会日程

第1日 2026年7月25日(土) 10:00～20:00(情報交換会まで)

会場：パレブラン高志会館、富山県教育記念館

時間	10:00～	10:30 ～ 12:30	12:30～14:00	14:00～ 14:30	14:40 ～ 17:10	17:30 ～ 20:00
内容	受付 発表者打 合せ(各会 場)	自由研究発表 (120分) 1-3：パレブラン 高志会館 4-7：富山県教育記 念館	昼食・休憩・移 動 若手・次世代ラ ンチミーティン グ(12:35～13:30) 富山県教育記念 館大会議室(5 階)	開会行事 学会賞表彰 パレブラン 高志会館	公開シンポジウム (150分) パレブラン高志会館	情報交換会 パレブラン高志会館

第2日 2026年7月26日(日) 8:30～16:10

会場：富山国際大学呉羽キャンパス

時間	8:30	9:00 ～ 11:30	11:30～ 12:30	12:30 ～ 14:30	14:40 ～ 16:10
内容	受付 発表者打 合せ	自由研究発表 (150分)	昼食・休憩	課題研究 (120分)	ラウンドテーブ ル(90分)

※ 2日目は富山駅前から呉羽キャンパスまでのシャトルバスを運行します。ご活用ください。

※ 路線バスを利用することも可能です。

※ 呉羽キャンパスは駐車場もございます。

2 大会参加申込み、及び大会参加費の支払いについて

(1) 大会参加申込み

① Peatix による申込(推奨)

<https://peatix.com/event/4963510>

【Peatix】



- 大会への参加を希望される学会の正会員、及び今回の大会のみ参加の臨時会員、院生・学生会員の方は、各自、上記のチケット販売サイトPeatixよりお申し込みください。
- 大会で発表する方(口頭発表をしない連名の共同研究者を含む)は、それぞれ正会員である必要があります。未入会の場合は、入会后、参加申込みをしてください。期限内に入会できるよう、学会事務局に速やかに入会手続きを行ってください。

- 参加申込みと同時に、大会参加費の支払いを行なってください。なお、Peatixの利用にはアカウント登録〔無料〕が必要です。

② エントリーフォームによる申込(Peatix 申込ができない場合に限る)

<https://forms.gle/yYMRjHQgL3KwE39m7>

【フォーム】



- エントリーフォーム用QRコードから参加申込みを行なってください。
- 当日、受付時に現金で参加費をお支払いいただきます。お釣りのないようにご注意ください。

(2) 大会参加費

* 正会員・臨時会員	事前申込み	4,000円	※7月15日まで
	直前・当日申込み	5,000円	※7月16日以降
			(～26日まで)

* 院生・学生会員	一律	2,000円
-----------	----	--------

* 情報交換会参加費	正会員	5,500円
	院生・学生会員	4,000円
	臨時会員・協賛企業等	8,000円

※情報交換会にご参加いただける方は、Peatixで参加申込みをされる際、「大会参加費」に加えて「情報交換会参加」チケットをご購入ください。

※情報交換会のチケットは、大会参加費とは別に、大会当日まで購入することができます(Peatixより)。是非、ご参加をご検討ください。

【2日目に関わる費用】

* シャトルバス乗車（富山駅～呉羽キャンパス往復）	2,000円
* お弁当（お茶付き）	1,000円
(アレルギー除去食の対応はできかねます。ご容赦ください。)	

(3) 大会参加費の支払い

- 大会参加の申込みは大会当日まで可能ですが、円滑な大会運営のため、可能な限り「事前申込み」へのご協力をお願いいたします。
- 事前の大会参加費でお支払いいただけるのは、7月15日(水)までとなります。7月16日以降は、「直前・当日申込」の大会参加費となりますのでご注意ください。
- シャトルバス、お弁当の申込も7月15日(水)までとなります。

3 「自由研究発表」の発表要領

(1) 「自由研究発表」の発表時間について

自由研究発表の口頭発表及び質疑応答の時間は、下記の通りとします。

※発表に使用するPCはご自身でご持参ください。

■個人研究発表（登壇者が1名）・・・発表 15分、質疑応答 10分

■共同研究発表（登壇者が1名～複数）・・・発表 15分、質疑応答 10分

※共同研究発表の場合、発表時間内で発表者の分担を行うものとします。

(2) 発表の取止めについて

※ 万一、お申込みいただいた発表を取りやめる場合は、必ず事前に研究大会準備委員会までご連絡ください。 (jase40th2026@gmail.com)

4 「発表要旨集録」について

(1) 「発表要旨集録」のダウンロードのお願い

本大会では、「研究大会プログラム」・「研究要旨集録」について、冊子による配布はいたしません。参加者ご自身でダウンロードしていただく方式をとります。

※ 「発表要旨集録」は、7月20日頃を目途に、参加申し込みをされた方に、メールにて指定した URL (Google ドライブ) から電子配信 (PDFファイル) する予定です。

研究大会の当日は、ご自身で必要なページをプリントアウトしてご持参いただくか、URL よりダウンロードしたファイルを情報端末により閲覧できるようにするなどのご準備をお願いいたします。

※ 当日、紙媒体による「研究要旨集録」配布はありませんので、事前のご準備をお願いいたします。

(2) 発表資料の配付について

※ 発表要旨以外の発表資料 (紙媒体) を用意される場合は、当日ご自身で会場にご持参ください。

※ 参加申し込みをされた方に、電子媒体 (PDFファイル) などを事前配付できるよう、7月20日頃を目途に、発表資料置き場を連絡します。(提出は任意です)

※ 発表資料置き場のURL (Googleドライブ) は後日連絡します。

※ 当日までアップロードは可能ですが、参加者に事前にダウンロードしてもらうためには、前日までアップロードされることをお勧めします。

※ 発表資料は、各自の発表区分 (分科会) ごとの発表資料置き場のフォルダに、ご自身で配付するファイルをアップロードしてください。

(3) 大会会場での Wi-Fi 接続について

【1日目】

パレブラン高志会館 : 無料でWi-Fiの利用が可能です。

富山県教育記念館 : Wi-Fiの対応はございません。必要がある場合は、パレブラン高志会館でWi-Fiに接続していただき資料のダウンロード等をお願いいたします。

【2日目】

富山国際大学 : 下記に接続してください。

【ネットワーク】 tii-guest

【PIN】 tiiguest

5 連絡事項

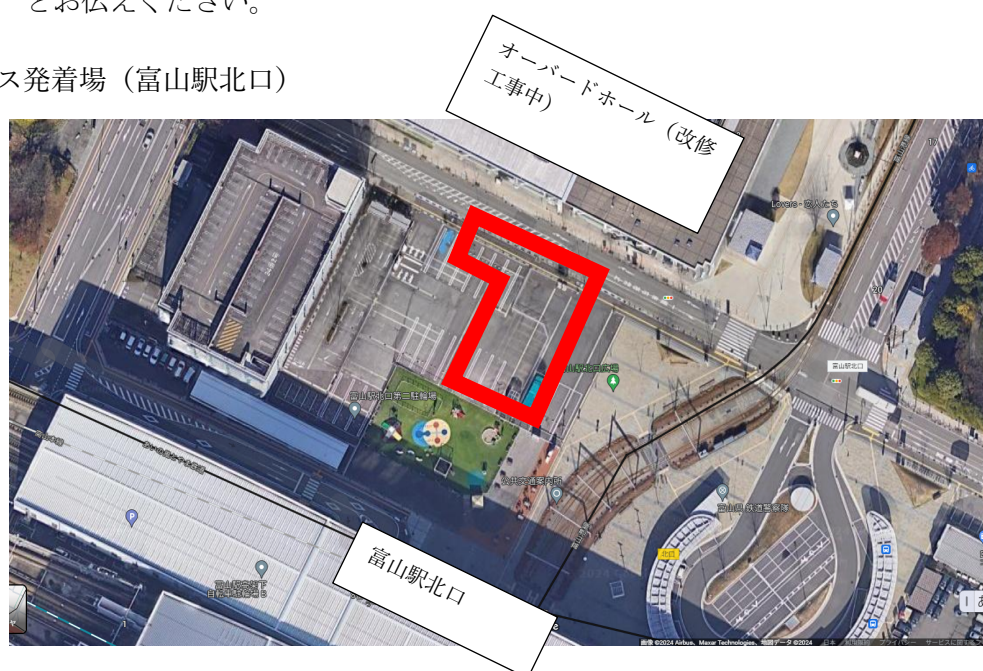
① シャトルバスの運行について

- 大会2日目に富山駅北口（オーバードホール側）から富山国際大学呉羽キャンパスまでのシャトルバスを運行いたします。事前申込制となりますので、ご利用の方はPeatixによる大会参加申込の際にあわせて申込をお願いいたします。

運行表 (予定)	富山駅北口		呉羽キャンパス			富山駅北口
	発		着	発		着
①	8:00	⇒	8:30	8:40	⇒	9:10
②	9:20	⇒	9:50	10:00	⇒	10:30
③	11:50	⇒	12:20	12:30	⇒	13:00
④	13:20	⇒	13:50	14:50	⇒	15:20
⑤	15:30	⇒	16:00	16:30	⇒	17:00

- 路線バスでお越しになることも可能です（運賃は480円）。運行表は富山地鉄バスHPをご覧ください。
https://www.chitetsu.co.jp/?page_id=1266&code=00101&direction=282&daycriterrion=0
- 乗り場は南口ロータリーから4番線（小杉駅行き、「富山短期大学南口」下車）です。5番線の「富山国際大学」行きは別キャンパスですのでご注意ください。
- タクシーご利用の場合は、片道5,000円程度です。乗り場は南口、北口にありますが、待機台数は南口の方が多いです。行き先を「富山国際大学呉羽キャンパス」とお伝えください。

シャトルバス発着場（富山駅北口）



② 昼食について

- 1 日目：お弁当の用意および会場での昼食販売はありません。なお、会場周辺には、コンビニエンスストアやファストフード店、レストラン等多数ございます。ただし、休日のため混雑する恐れがありますのでご注意ください。
- 2 日目：お弁当を販売いたします。参加申込と併せてご注文ください。呉羽キャンパスからの徒歩圏内にコンビニエンスストア等はありません。2 日目に限り軽食の販売が予定されております。よろしければご利用ください。

③ 駐車場について

- 1 日目：パレブラン高志会館（有料）並びに近隣の有料駐車場をご利用ください。
- 2 日目：富山国際大学呉羽キャンパスの駐車場（無料）をご利用ください。
- *いずれの会場も、HP から「アクセス」で近隣マップをご確認いただけます。



富山国際大学

6 各種リンクとお問い合わせ先

- 日本学校教育学会HP <http://www.jase.gr.jp/>
- 富山国際大学HP <https://www.tuins.ac.jp/>
- パレブラン高志会館HP <https://www.koshikaikan.com/>



パレブラン高志会館

- 大会への参加、自由研究発表等に関することについての問合せ

【大会準備委員会事務局】

日本学校教育学会第 40 回研究大会準備委員会事務局（委員長：湯澤 卓）
〒930-0196 富山県富山市願海寺水口 444 富山国際大学呉羽キャンパス
TEL：076-464-6499（湯澤研究室直通）
E-mail：jase40th2026@gmail.com



日本学校教育学会

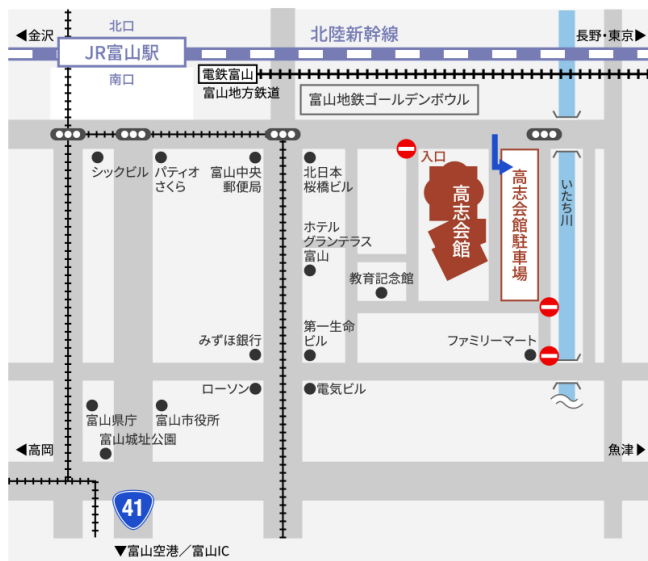
- 入会等に関する問合せ

【日本学校教育学会事務局】

日本大学文理学部教育学科（〒156-8550 東京都世田谷区桜上水 3-25-40） TEL：03-5317-9370（事務局 田中謙研究室直通）
E-mail：JASE.officialmail@gmail.com

7 各会場へのアクセス

【パレブラン高志会館】* 教育記念館は隣接です。



- ※ 駐車は2時間無料。以降30分100円です。
- ※ 満車の際は近隣駐車場をご利用ください。路上駐車や迷惑駐車根絶にご協力をお願いします。
- ※ 徒歩→富山駅から約10分です。

【富山国際大学呉羽キャンパス】



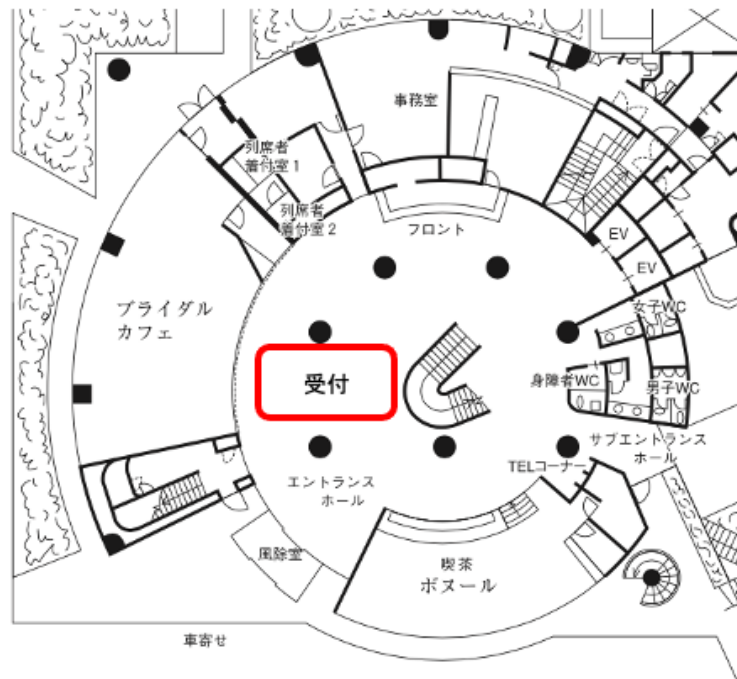
- ※ キャンパス周辺に大学駐車場がありますのでご利用ください。大学正門前（西側）が便利です。
- ※ 大学正門のロータリーはシャトルバスの乗降場です。自家用車の乗り入れはご遠慮ください。



8 会場案内図

(25日) パレプラン高志会館会場図

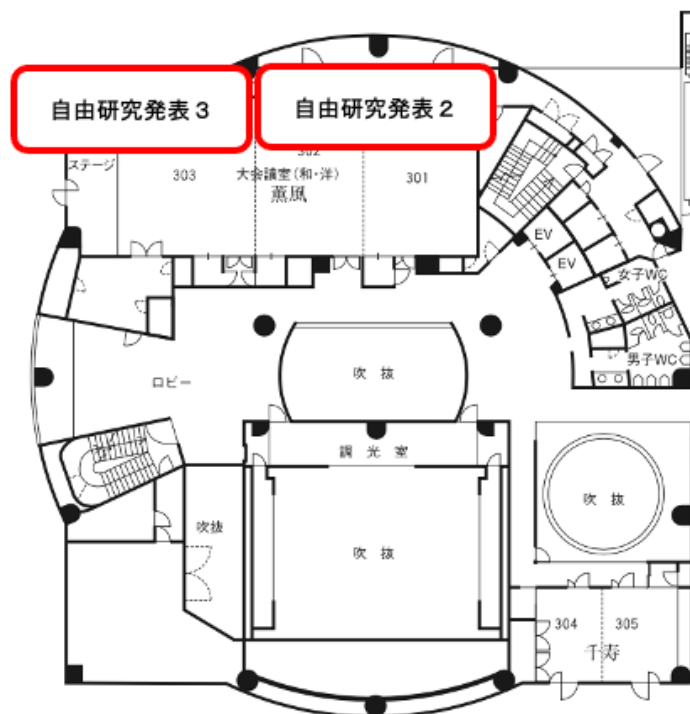
1階



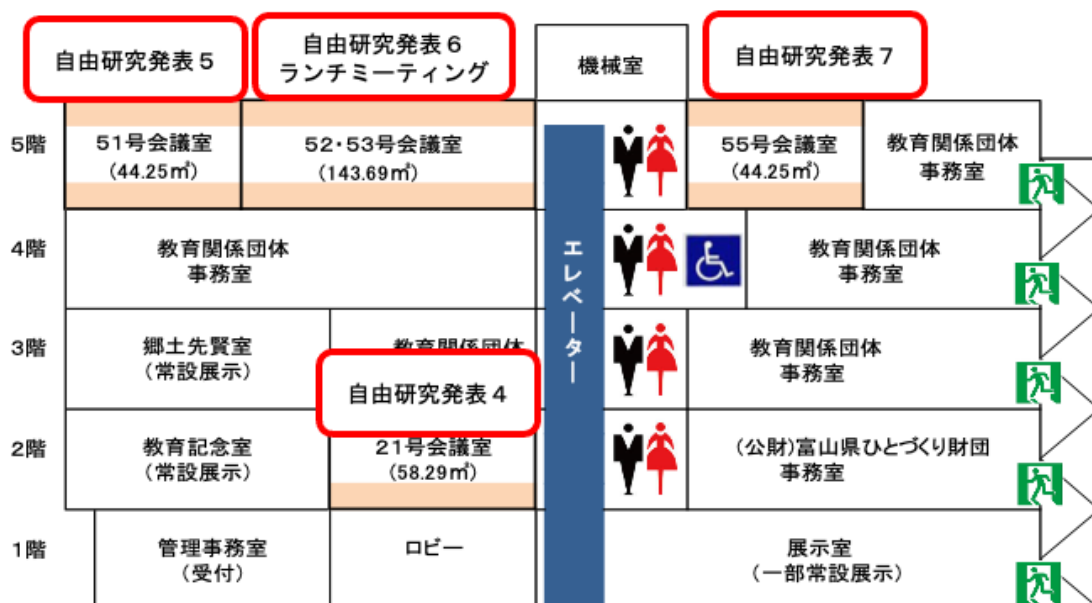
2階



3階



(25日) 富山県教育会館会場図



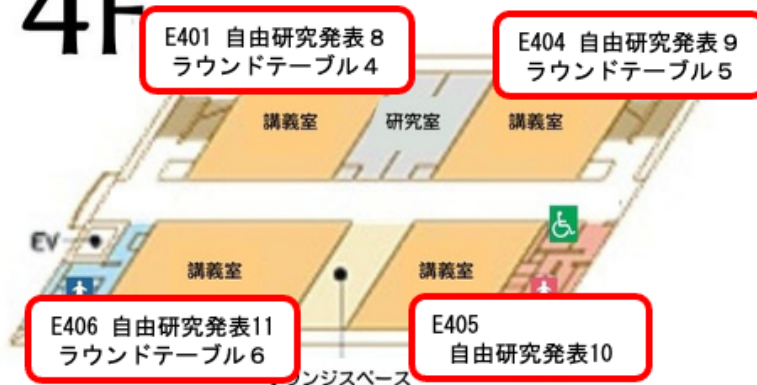
(26日) 富山国際大学呉羽キャンパス

E館

5F



4F



1F

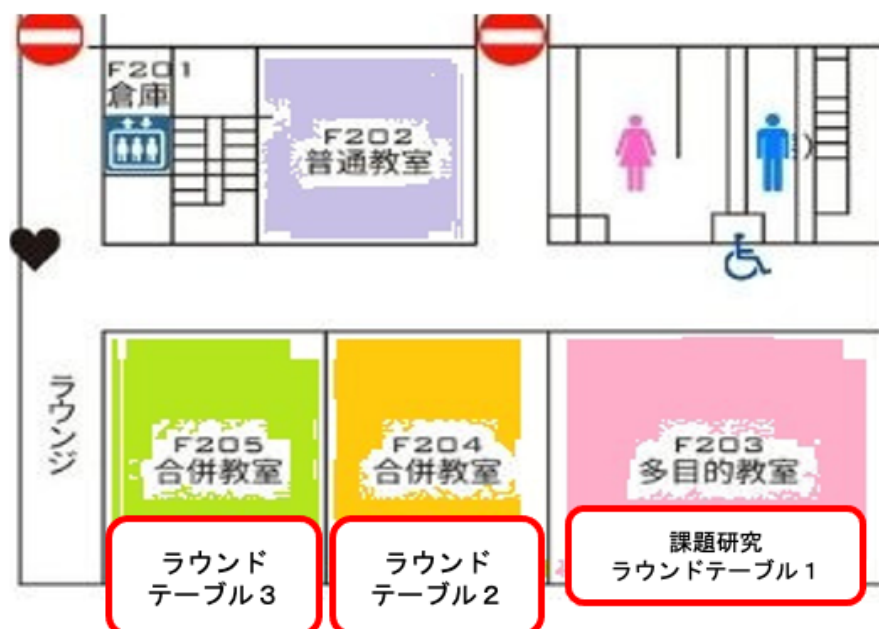


* 昼食は、E 館ラウンジや各教室をご利用ください。

* お弁当は、11 時以降に E 館ラウンジでお配りします(事前注文された方のみ)

(26日) 富山国際大学呉羽キャンパス

F館 (2階)



研究成果を、授業・現場・次世代へ。

大学院生・若手研究者との共同研究を本にまとめたい。科研費・研究費で研究成果を刊行したい。授業内容に合う市販テキストが見つからない。教育実践・調査研究を現場教員にも届く形にしたい。少部数でもISBN付きで正式出版したい。

学校教育研究の書籍化・テキスト化を少部数から支援します。

研究成果の出版

少発行出版

研究書・実践記録・学会成果・記念出版に
少部数から正式出版 / ISBN取得、Amazon等で流通
国会図書館納本対応 / 研究費・助成金での相談可

授業用テキスト出版

少部数
テキスト出版

少人数授業・ゼミ・教職課程・大学院授業に
講義内容に合わせて編集 / 受講者数が少なくても可
改訂・増刷にも対応 / 教科書採用・販売方法も相談可

少部数から、研究費に応じた出版設計が可能

費用の目安 30万円前後～ 仕様・部数・流通方法によりお見積りします

学校教育・教育実践 分野の出版実績

日本学校教育学会関連書籍・教育実践研究書・
授業テキストなど多数



出版実績3,000タイトル超
全国300大学での
ご利用実績

三恵社WEBサイト
詳しくは
こちらへ

研究成果の出版・授業テキスト化について、まずはお気軽にご相談ください。 ☒ info@sankeisha.com



株式会社 三恵社

本社

TEL:052-915-5211

〒462-0056 名古屋市中区中丸町2-24-1
FAX:052-915-5019

東京営業所

TEL:03-6657-0970

〒132-0035 東京都江戸川区平井5-14-2-401
FAX:03-6657-0971



sankeisha.com

7 月 25 日(土)

会場：パレブラン高志会館、富山県教育記念館

時間	10:00～	10:30 ～ 12:30	12:30～14:00	14:00～ 14:30	14:40 ～ 17:10	17:30 ～ 20:00
内容	受付 発表者打 合せ(各会 場)	自由研究発表 (120 分) 1-3：パレブラン 高志会館 4-7: 富山県教育記 念館	昼食・休憩・移 動 若手・次世代ラ ンチミーティン グ(12:35～13:30) 富山県教育記念 館大会議室(5 階)	開会行事 学会賞表彰 パレブラン 高志会館	公開シンポジウム (150 分) パレブラン高志会館	情報交換会 パレブラン高志会館

【パレブラン高志会館2階 カルチャーホール】

自由研究発表 1

司会 多田 孝志（金沢学院大学）
司会 石森 広美（北海道教育大学）

1) 10:30～10:55

教職課程学生の小学校外国語デジタル教科書観と活用意欲

石森 広美（北海道教育大学）

2) 11:00～11:25

生成 AI 時代における学校教育のリテラシー形成に関する一考察

—検証・表示・情報管理の学習化に着目して—

三好 哲郎（横浜薬科大学）

3) 11:30～11:55

若年教員の自律的成長を支える学校 OJT-VI

～有機的な組織とリーダーシップ～

柳瀬 啓史（元公立小学校教諭）

4) 12:00～12:25

生成 AI による指導案の逆生成

—教師教育における暗黙知可視化の可能性—

○後藤 弘光（金沢学院大学）
多田 孝志（金沢学院大学）

【パレブラン高志会館3階 301】

自由研究発表 2

司会 下島 泰子 (東京学芸大学)
司会 服部 孝彦 (大妻女子大学)

1) 10:30～10:55

Fostering Transferable Advanced Cognitive Skills in English Language Learning:
A Pedagogical Perspective

服部 孝彦 (大妻女子大学)

2) 11:00～11:25

学習評価に関する諸課題と方策
—より妥当性と信頼性を高めるために—

石橋 裕 (東邦音楽大学)

3) 11:30～11:55

実践事例に関する研究論文の構成と意義
—学校現場と学術の架橋に着目して—

長倉 守 (岐阜大学教職大学院)

4) 12:00～12:25

国際学会の発表採択における評価の枠組み
—CFP(Call for Papers)及び査読基準の内容分析から—

下島 泰子 (東京学芸大学)

【パレブラン高志会館3階 303】

自由研究発表 3

司会 辻村 貴洋（上越教育大学）
司会 福島 正行（岩手大学）

1) 10:30～10:55

学校事務職員におけるジョブ・クラフティングがその職務実態に与える影響

福島 正行（岩手大学）

2) 11:00～11:25

「総合的な探究の時間」の持続的な活動改善を目指した組織運営に関する研究
ー小規模校の教務課によるプロセスファシリテートを通してー

浅本 拓哉（石川県立松任高等学校）

3) 11:30～11:55

公立の中高一貫教育の課題と可能性
ー愛知の高校再編整備に着目してー

木下 勝義（中部大学）

4) 12:00～12:25

学校PFIを継続的・持続的に展開していくための
制度・運営・ソーシャルキャピタル的条件についての考察
ー富山市がいかにして学校PFIを継続実施してきたかに着目してー

藤井 祥宏（東京学芸大学/株式会社Gakken）

【富山県教育記念館2階 21号】

自由研究発表 4

司会 山元 研二（北海道教育大学釧路校）
司会 鈴木 久米男（福島学院大学）

1) 10:30～10:55

教育・保育の質向上に関わる資質能力及び組織運営に対する幼稚園教諭等の認識の実態

—A 県幼稚園の管理職及び教諭等を対象とした調査結果を踏まえて—

鈴木 久米男（福島学院大学）

2) 11:00～11:25

教職大学院における校長の力量形成

—複雑化・高度化する学校組織をマネジメントする校長の資質・能力育成に関するカリキュラム開発—

伊東 哲（東京学芸大学教職大学院）

○浅野 あい子（東京学芸大学教職大学院）

3) 11:30～11:55

授業遂行における意思決定プロセスの分析

—教師の授業認知に基づく事例研究—

明比 宏樹（広島都市学園大学）

平井 里奈（今治市立近見小学校）

4) 12:00～12:25

教員養成系大学における人権の課題の取り扱いに関する研究

—社会科教育法における「ハンセン病問題」の授業から—

山元 研二（北海道教育大学釧路校）

【富山県教育記念館5階 51号】

自由研究発表 5

司会 末吉 雄二 (日本工業大学)

司会 藤田 武志 (日本女子大学)

1) 10:30～10:55

教員集団内における心理的安全性の維持・向上とその停滞

和田 真季 (鹿児島大学)

2) 11:00～11:25

学校教育における不確実性のマネジメントをめぐって

—ベックやルーマンのリスク社会論を手がかりに—

前澤 佳明 (兵庫教育大学大学院)

3) 11:30～11:55

中年期教師における職務継続の心理プロセスに関する質的検討

丸山 香織 (長岡市立関原中学校/ 兵庫教育大学大学院)

4) 12:00～12:25

高等学校における学習の個別化を規定する学校構造

—管理職インタビューに基づく検討—

竹本 弥生 (横浜薬科大学)

【富山県教育記念館5階 大会議室】

自由研究発表 6

司会 佐田東 彰（金沢学院大学）

司会 大矢 隆二（國學院大學）

1) 10:30～10:55

離島小規模校における体づくり運動の包摂的授業デザインに関する質的研究

大矢 隆二（國學院大學）

2) 11:00～11:25

子どもの無限の可能性を引き出し高める体幹を鍛える体育

—瑞穂第三小学校の実践—

隅内 利之（隅内教育研究所）

3) 11:30～11:55

学校教育における「社会化」の相克と主体の生成に関する一考察

—日本における市民性教育像の理論的再構築に向けて—

石原 優（名古屋大学大学院）

4) 12:00～12:25

学校規模ポジティブ行動支援（SWPBS）における児童・教員への波及効果

—小学校での一次支援を通して—

佐田東 彰（金沢学院大学）

【富山県教育記念館5階 55号】

自由研究発表 7

司会 中山 博夫(目白大学)
司会 和井田 清司(武蔵大学)

1) 10:30～10:55

松下拡における社会教育実践の構造と展開
ー長野県松川町における健康学習を中心にー

和井田 清司(武蔵大学)

2) 11:00～11:25

学校外における多様な学びの保障の実態と政策的対応に関する一考察
ー「不登校」以外の長期欠席者の学びの保障の事例に着目してー

大塚 千尋(東京学芸大学)

3) 11:30～11:55

人文社会学部経営学科における留学生のウェルビーイングに関する実証的研究
ー学園祭参加および日本人学生との交流授業に着目してー

元 笑予(帝京平成大学)

4) 12:00～12:25

マレーシアにおける生活文化調査と異文化トレーニング・グローバル課題トレーニング
ー科研費研究応募の方向性ー

中山 博夫(目白大学)

7月25日（土） 12：35～13：30

【富山県教育記念館 大会議室(52・53号室)】

若手・次世代ランチミーティング

7月25日（土） 14：00～14：30

【パレブラン高志会館 カルチャーホール】

開会行事

【パレブラン高志会館2階 カルチャーホール】

公開シンポジウム

「VUCA とは何か ―社会の未来予想図と教育の展望―」

【趣 旨】

VUCA は、「予測不能な未来や社会」を示す言葉として広く知られている。生成 AI の台頭、世界各国の戦争や紛争、テロの脅威、難民問題、環境問題、経済格差、宗教的な対立、教育格差や人口問題など、我が国だけでなく世界のあらゆる場所で様々な問題が発生し続けている。OECD は SDGs プロジェクトを進め、真に持続可能な社会を目指そうとしているが、その効果はかなり低い。特に、米国を中心とした自国至上主義の台頭によって、経済活動を活発にする、あるいは貨幣の集合を加速させるという理念が暴走している国や地域では、持続可能よりも「今」を重視する。それはすなわち、未来への展望を失っていると考えられる。本当に次世代にこの地球を残していけるのか。国を、社会を、地域を、平和を残していくことができるのか。予測不能とは、このような不安と共にある。

OECD は「OECD Future of Education and Skills 2030」プロジェクト内において「Learning Compass 2030」と「Teaching Compass」を示した。学習者と教師を主体（エージェント）として、その能動的な働きを「エージェンシー(Agency)」という概念を示すことで教育への視点の広がりを求めている。この機にあって、国際的な教育に対する視点は「個の主体性」と「他者（AIを含む）との共同・協働性」の大きく2つで示されていると考えることができる。OECD は DeSeCo プロジェクトで示したキーコンピテンシー以降、個の「資質・能力」への期待を隠さない。既存の知識や技能、設備、システム、環境などにとらわれない真の人間の活動は、コンピテンシーがもつ最も深くて本質的な働きによるものである。その結果として生まれるのがウェル・ビーイングという概念である。人間が人間としてよりよく生きるという行為そのものが、結果として社会も、環境も、その人も幸せにするという発想は、教育の究極であり、また原点でもあるだろう。

本シンポジウムでは、教育を取り巻く様々な状況や新しい情報、あるいは知見などに触れ、シンポジストと参加者が問題意識を共有しながら、各々の専門的な立場で思考を深め、より良い研究に繋げることを目的とする。参会者一人一人が思考を交差させることで、教育の未来に明るい一筋の光をもたらす機会としたい。

コーディネーター : 多田 孝志 (金沢学院大学) 湯澤 卓 (富山国際大学)
シンポジスト : 木村 優 (福井大学大学院 教授)
白水 始 (国立教育政策研究所 初等中等教育研究部長)
綿引 宏行 (海外子女教育振興財団 理事長)

7月25日(土) 17:30 ~ 20:00

【パレブラン高志会館2階 麗花の間】

情報交換会

宿泊、会議、宴会、法事、中国料理「リトル上海」、ビアガーデン

パレブラン高志会館

☆お申し込み・お問い合わせは TEL (076) 441-2255 <https://www.koshikaikan.com/>
〒930-0018 富山市千歳町 1-3-1  0120-542-489 FAX (076) 441-1770

7 月 26 日(日)

会場：富山国際大学呉羽キャンパス

時間	8:30	9:00 ～ 11:30	11:30～ 12:30	12:30 ～ 14:30	14:40 ～ 16:10
内容	受付 発 表 者 打 合 せ	自由研究発表 (150 分)	昼食・休憩	課題研究 (120 分)	ラウンドテーブ ル(90 分)

【富山国際大学呉羽キャンパス E401教室】

自由研究発表 8

司会 安藤 知子（上越教育大学）
司会 田中 謙（日本大学）

1) 9:00～9:25

ことばの教室設置政策における政治過程
ー北海道旭川市の事例分析ー

田中 謙（日本大学）

2) 9:30～9:55

学校教育への起点としての「0 歳からの教育」に関する理論的検討
ー乳児保育の新たな政策とその展開の意義ー

奥泉 敦司（金沢学院大学）

3) 10:00～10:25

高校教員の個業化・専門分化傾向に関する考察
ー高校の教員組織における協働の困難と可能性の構造的分析ー

船越 康平（京都市立堀川高校）

4) 10:30～10:55

学び合うコミュニティの実践的開発
ー相互主体的教育関係を構築した協働的リフレクションの試みからー

三枝 祐紀（長野県大町市立八坂小中学校）

5) 11:00～11:25

校長は自らのリーダーシップ発揮をいかに語る／語らないのか
ー校長の経営行動とそれを支える社会ネットワーク探究の視点からー

○安藤 知子（上越教育大学）

○木下 豪（富山大学）

諏訪 英広（川崎医療福祉大学）

高谷 哲也（鹿児島大学）

吉田 尚史（山形大学）

【富山国際大学呉羽キャンパス E404教室】

自由研究発表 9

司会 山崎 保寿（静岡大学）
司会 菅原 至（上越教育大学）

1) 9:00～9:25

日本語指導における越境的実践の可能性
—学校外における特別の教育課程の実証から—

山田 文乃（大阪成蹊大学）

2) 9:30～9:55

韓国における学校と地域の連携を支える中間支援組織に関する一考察
—京畿道 H 市の事例を中心に—

金 聯珠（神戸大学大学院）

3) 10:00～10:25

高等学校はどう変わったか
—総合学科におけるトラッキングの変容—

小西 尚之（金沢学院大学）

4) 10:30～10:55

縮小社会における地方小規模高校の役割
—地域協働型探究による若者の社会化と挑戦支援、地域文化循環の形成—

済渡 香純（宮城県一迫商業高等学校）

5) 11:00～11:25

高等学校の再編統合に関する要因の分析
—政策の窓理論を援用して—

山崎 保寿（静岡大学（名））

【富山国際大学呉羽キャンパス E405教室】

自由研究発表 10

司会 中川 智之(川崎医療福祉大学)

司会 佐久間 邦友(日本大学)

1) 9:00～9:25

児童の向社会的行動および規範行動の心理的機制的検討

—学級の向社会的目標構造に着目して—

森 健司(埼玉県深谷市立岡部小学校/兵庫教育大学大学院)

2) 9:30～9:55

中学生段階の就業体験活動はキャリア形成の役に立つのか？

—「北九州ゆめみらいワーク2025」効果検証調査をもとに—

○小澤 昌之(東京通信大学)

坂井 裕紀(東京大学)

藤本 徹(東京大学)

3) 10:00～10:25

教師の自己開示の質的検討

—教師の語りに着目して—

菊池 航(上越教育大学大学院)

4) 10:30～10:55

ベテラン教員の就労継続要因

—授業実践における生徒との相互作用に着目して—

内田 一樹(立命館大学院)

5) 11:00～11:25

公立小中学校における勤務時間管理の不完全履行

—「勤務時間管理の客体」をめぐる制度と実態の乖離—

山中 樹(みどり市立大間々中学校)

【富山国際大学呉羽キャンパス E406教室】

自由研究発表 11

司会 原田 信之(中部大学)
司会 渡邊 はるか(目白大学)

1) 9:00～9:25

高等学校英語科における機械翻訳を活用した英作文指導
—学習意欲とライティングへの抵抗感の変化に着目して—

春岡 恵子(兵庫県立洲本高校)

2) 9:30～9:55

相互評価における「評価」と「学習」の関係再考
—評価判断と自己変容の関係に着目して—

直井 良太(千代田区立九段中等教育学校)

3) 10:00～10:25

アクティブラーニングにおけるVR教材の活用モデルの構築
—先行研究の分類・提示順序の検証・フィールドワーク実践の統合的考察—

西村 泰長(関西外国語大学短期大学部)

4) 10:30～10:55

AI・ICTを活用したグループ対話の多角的分析
—小学校社会科における短い個別発話を対象に—

後藤 弘光(金沢学院大学)
○枝元 香菜子(金沢学院大学)
多田 孝志(金沢学院大学)

5) 11:00～11:25

対話型授業における児童の発話阻害要因の測定
—社会的手抜き・他者評価意識・発話機会制約の尺度構成と性格特性との関連性—

後藤 弘光(金沢学院大学)
○渡邊 はるか(目白大学)
多田 孝志(金沢学院大学)

【富山国際大学呉羽キャンパス E501教室】

自由研究発表 12

司会 出羽 孝行 (龍谷大学)
司会 村山 大樹 (帝京平成大学)

1) 9:00～9:25

不登校児童生徒への支援の種別と時期に関する検討
ー不登校経験者を対象とした意識調査からー

村山 大樹 (帝京平成大学)

2) 9:30～9:55

大学編入学後の満足度と居場所の確保
ー高等教育機関におけるサポート体制に着目してー

新里 卓 (日本外国語専門学校)

3) 10:00～10:25

学校で外国人児童生徒等を取り巻く環境
ー学級担任の役割が子どもの自己肯定感に及ぼす影響についてー

久保 和奏 (静岡大学教職大学院)

4) 10:30～10:55

シンガポール日本人学校クレメンティ校の特色ある国際理解教育の実践

鶴巻 佳乃 (目白大学)

5) 11:00～11:25

韓国におけるいじめ対策に関する研究

出羽 孝行 (龍谷大学)

【富山国際大学呉羽キャンパス E506教室】

自由研究発表 13

司会 蜂須賀 洋一（上越教育大学）

司会 白井 克尚（愛知東邦大学）

1) 9:00～9:25

日本の歴史教科書におけるインドネシア植民地期関係記述の特質に関する考察

白井 克尚（愛知東邦大学）

2) 9:30～9:55

山田敏文の生活綴方実践に関する一考察

松本 圭朗（近畿大学）

3) 10:00～10:25

今井誉次郎の道徳教育をめぐる検討

瀬川 千裕（大阪樟蔭女子大学）

4) 10:30～10:55

【実践報告】生徒も教師も持続可能な「取り出し」授業の実現を目指して
—東京都立高等学校：「歴史総合」の実践を例に—

洪澤 拓真（東京都立高等学校）

5) 11:00～11:25

教育裁判例教材を用いた教育実践の判断構造の可視化と教師の法的判断力形成に関する研究

蜂須賀 洋一（上越教育大学）

課題研究

次世代の学校教育を構想するー学びを問い直す

今期研究推進委員会では、学会の掲げる3ヶ年テーマ「次世代の教育・学校」に基づき、今後3ヶ年の研究テーマとして「次世代の学校教育を構想する」を掲げることとした。学会の掲げる「次世代の教育・学校」がめざすのは、単に新しい教育技術を開発・導入したり、制度改革を遂行したりすることではない。「教育の本質や学校という制度の根幹を問い直しながら、これからの社会にふさわしい「学び」「学校」の姿を構想すること」である（学会ホームページ）。

グローバル化、高度情報化、リスク社会化（感染症の世界的拡大、災害多発等）、少子化高齢化等、社会が著しく変動するなか、産業構造ならびに労働市場のありよう、そして私たちの日常生活のありようは大きく変化している。この一方で国家・地域間の紛争、差別・排除、格差の拡大、環境破壊等、グローバルな課題は山積する一方である。この社会の情勢をみすえ、国内外では諸機関がこれからの教育と学校のあるべき姿を求め、改革の方向性を打ち出している。多様な改革像が乱立するなかで、私たちは次世代の学校教育をどのように構想していったらよいだろうか。研究推進委員会では今後、あらためてこの社会の未来を展望しながら学びと学校のあり方を問い直し、次世代の学校教育を探究することにした。

初回にあたる今年度は、タイトルのとおり、「学び」に焦点をあてる。本課題研究ではまず、これからの社会における学びのあり方を探究するにあたって必要となる理論的枠組みとして、目下、国内外で提起されている「学び」をめぐる議論について整理検討する。そのうえで、子どもたちの対話に重きを置いた小学校国語の授業実践、中高一貫校での子どもの探究活動の授業実践という二つの事例をもとに、今後私たちがめざすべき子どもの学びのありかたの糸口を探ることにした。

【登壇者】

飯窪 真也（国立教育政策研究所／教育環境デザイン研究所）

中野 裕己（新潟大学附属小学校）

水本 祐之（奈良県立国際中学校・高等学校）

【司会・進行】

中山 博夫（目白大学）

金井 香里（武蔵大学）

（研究推進委員会委員長 金井香里）

ラウンドテーブル1

高校探究学習の考え方・進め方[その3] ー高校改革と探究学習：事例校の取組に学ぶー

和井田清司（武蔵大学）

金井香里（武蔵大学）

篠塚明彦（筑波大学）

和井田祐司（愛知教育大学）

渋澤拓真（都立高校）

1. 本ラウンド・テーブルの意図と経過（和井田清司）

本企画では、高等学校（適宜「高校」と略記）段階における「探究学習」の導入と展開に着目し、その理論的把握および実践課題等につき議論してきた。2024年度は「高校総合学習（探究）」、2025年度は「高校総合学習（探究）と教科（探究）の関係」を検討した。今回は、探究学習を中心に授業改革や高校改革を推進する事例校の実践的知見を学ぶ。なお、高校は学科制度[普通科・専門学科・総合学科]や地域・生徒の実態[進学校・進路多様校]に応じて多様であり、それらの要因は事例校の実践にも一定の影響を与える。奈良県立国際高等学校は、国際科（専門学科の一つ）として、学校設定教科「国際教養」中の諸科目（「グローバル探究」「世界の言語」）を活用し、国際高校の特徴を出している。大阪府立富田林高等学校は普通科の伝統校だが、探究学習を核に中高一貫教育を現場から構築してきた。大阪府立松原高等学校は総合学科への改編を経て、原則履修科目の「産業社会と人間」「課題研究」を創造的に活用し、探究学習の質を進化させてきた。

なお、事例校の実践を参照する際、3つの視点―すなわち、①沿革を含む学校紹介、②生徒の学びの姿、③学習環境の構成・学習指導の工夫―に焦点をあてる。

2. 奈良県立国際高等学校の探究学習ー実践の特長と示唆（金井香里）

【学校の沿革・概要】 本校は、2018年10月に県教育委員会によって策定された「県立高等学校適正化実施計画」に基づき、2020年4月に開校した。同計画には、「国際科を設置し、グローバル教育を推進」すること、「国際バカロレア認定を目指すこととし、2023年に県立中学校を併設」することが盛り込まれ（奈良県教育委員会、2018、2頁）、開校以降、2期にわたり採択されたワールドワイドラーニング（以下、WWL）コンソーシアム構築支援事業をつうじて教育環境が整備された。2025年度には、中高一貫教育が完成し、2026年4月現在、国際バカロレア（以下、IB）のミドルイヤープログラム（以下、MYP）、ディプロマプログラム（以下、DP）、さらにユネスコスクールの認定校となっている。本校の沿革は、以下のとおりである。

2018年10月	奈良県教育委員会「県立高等学校適正化実施計画」策定
2020年4月	奈良県立国際高等学校設立（既存の県立高校普通科3校を特色ある2校に再編、そのうちの1校）
2021年4月	WWLコンソーシアム構築支援事業の採択（～2024年3月）
2023年4月	奈良県立国際中学校設立
同	中高・IBのMYP候補校（2024年12月認定）
2024年4月	WWLコンソーシアム構築支援事業の採択（～2026年3月）
2025年4月	ユネスコスクール認定
2024年5月	高校・IBのDPの候補校（2025年10月認定）
2025年度	中高一貫教育の完成（出典：学校ホームページ、国際中高DPハンドブック）

本校では、校訓に代わり使命（mission）を掲げている。その中核は、「多様な人々との積極的なコミュニケーションを通して、グローバルな視点でものごとを捉え、国際社会の平和と発展に貢献する資質・能力を育成する」である。そして育てたい力（generic skills）として、探究力、協働力、挑戦力、創造力、寛容さ、キャリアデザイン力の6つを挙げている。

中高一貫校化した現在、中学校は各学年2クラス編成、高校は各学年3クラス編成となっており、全校生徒数は、500名あまりである。

【生徒の学びの姿】 生徒たちは、おもに学校設定教科「国際教養」に設けられた2科目（「グローバル探究」、「世界の言語」）のうちの1つ、「グローバル探究」をつうじて探究学習に取り組む。「グローバル探究」は高校各学年配当の必修科目（3単位）であり、1年次より身近な問題についての探究のプロセスを繰り返す中で、自分自身の課題を設定しフィールドワークやアジアでのスタディツアーなどをつうじて探究を深め、最終学年では、高校生国際会議の開催・参加、日本語・英語での論文作成を目指す（R5年度WWL報告書、3頁ほか）。

2025年度をもって中高一貫教育が完成したことで、中学校からの入学者は中学校で3年間「グローバル探究基礎」に取り組んだ上で高校でも継続して探究学習を行うようになっていく。さらに2024年にIBのMYPの認定を受けたことで、生徒は中学校1年から高校1年まで検定教科書を用いながらIBの枠組みに沿った学びを経験している。それには評価のあり方も含まれ、中学校高校ともに定期テスト（中間テスト、期末テスト）はない。一方、2025年にIBのDPの認定を受けたことで、2026年度高校入学者より、高校1年後期から従来の教育課程（LIコース；Global Language & Inquiry）とDPコースに分かれることになる。

【学習環境の構成】 本校において「グローバル探究」は基幹科目として位置づけられ、全教員が担当し取組を進めている。「グローバル探究」の学習がより効果的となるよう組織されたものとして、学校設定教科「国際教養」のもう1つの科目である「世界の言語」、ゼミでの活動、学年をこえた探究学習の交流会などが挙げられる。それぞれの概要は以下のとおりである。

○「世界の言語」

1、2年次必修（2単位）、3年次選択（2単位）の科目である。1年次は全員が中韓独仏西という5つの言語・文化を学び、言語間の共通点・相違点に気づき言語への理解を深めるだけでなく、世界の多様性への意識を育む。2年次以降は選択した1言語の学びをさらに深め、当該言語を用いて国内外の高校生と交流する。

○ゼミでの活動

2 年次から組織され、各ゼミを教員 2 名が担当する。現在開講するゼミは、ESD（持続可能な開発のための教育）で掲げられる諸課題に基づき以下の 3 つとなっている。

A いのちと地球の調和をたもつ（環境、エネルギー、気候変動、減災・防災、海洋、生物多様性など）

B 理解と尊重で世界をきずく（環境、文化多様性、世界遺産・文化財、国際理解、平和など）

C 公正で公平な未来をつくる（平和、人権、ジェンダー平等、福祉、持続可能な生産・消費など）

○学年をこえた探究学習の交流会

高校では「たてにつながる探究交流会」、中学校では「たてにつながるポスター発表会」が開催されている。さらに中高間でも交流の機会がある。

これらとは別に、本校の教員・生徒・保護者間では、さまざまな価値観が共有されている。こうした価値観が学習指導に反映され、生徒たちが安心して探究活動に取り組む下地となっているものと考えられる。 ※引用参考文献は、大会当日の配付資料に掲載する。

3. 大阪府立富田林高等学校の探究学習―実践の特長と示唆（篠塚明彦）

【学校の沿革・概要】 富田林高校の前身は、1901 年に地域の開設要求を受けて開設された大阪府第八中学にある。戦後、新しい学校制度の下で、1948 年に大阪府立富田林高等学校となる。開校以来、大阪府南部の富田林に位置する伝統校として、自由な校風のもと地域社会のみならず、世界で活躍する人材（国立大学総長や国連事務次長など）を輩出してきた。そのような富田林高校にとって、大阪府の学校制度改革が少なからず影響をもたらすこととなる。まず、2007 年に大阪府の高校の学区が従来の 9 学区から 4 学区になり、通学区域の拡大がはかられた。このことにより、中学生は地元を離れより遠くの高校に通うことが可能となった。さらに、2014 年には大阪府の高校の学区が完全撤廃された。これにより、大阪府内の中学生は、どこの高校でも進路先として選択することが可能となった。富田林市周辺から大阪の中心地域へは 1 時間以内での通学が可能であり、中心地域にある受験学力上位の高校を選択する中学生も多くなっていった。高校生が地元地域から離れた高校に通う傾向が高まったのである。この点について、富田林高校元校長である易寿也氏は次のように述べている。

「学力の高い生徒層の地域からの流出が増え、引き継ぎ地域の人気校でありながら、学校に与えられたミッションが見えなくなってきた」（易 2018）。さらに、この時期、地元地域では人口減少やそれに伴う地域経済の活力低下といったことも起こっていた。このような状況が富田林高校における学校改革の大きな転機となっていた。

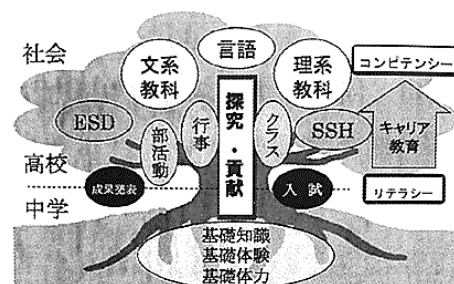
【学校改革の進展】 地元から優秀な生徒の流出という状況が進むなかで、2010 年代に富田林高校では、中高一貫化と探究学習とを軸に据えながらの学校改革を推進していく。以下、高橋（2022）に依拠しながら、富田林高校の改革の動きを整理してみたい。富田林高校改革のキー・マンとなる易寿也氏が、2011 年 4 月に校長として赴任した。易校長のもと、高校改革が動き出す。2012 年、易校長は同校の将来構想を検討するプロジェクト・チーム（以下、PT）を立ち上げた。また同年、改革の牽引役の一人となる A 教諭が着任する。PT での検討等のなかから将来構想として、高校受験を意識することなく深い学びを行えるように、中高一貫校化を目指すというビジョンが示された。また入試のための学習といった生徒の意識を変えるという視点から学校の特徴として探究的な学びを中心に据えることなどが検討された。さらに、同校は元来地域との結びつきを強く持っていることから、地域のネットワークとも

結びついた形で学校改革が志向されていった。

中高一貫校化の学校改革について易氏は「高校受験のない6年間で、現代社会に求められる探究的な学習や、他者と協働して課題解決をすることに力点を置いた教育で、学びの質の転換を目指した」（易、2018）と述べている。富田林中高一貫校がめざす教育目標には「グローバルリーダーの育成」が掲げられ、育みたい資質として、①グローバルな視野、②科学する心、③地域愛の三点が挙げられた。こうした教育目標、育みたい資質を踏まえ、2014年度からは（この段階ではまだ中高一貫校化は決定していない）、1年生に置かれた「E タイム」（＝総合的な学習の時間）改革が着手された。新しい「E タイム」では、キーワードに「探究と貢献」を掲げ、ゼミ形式での少人数授業の実施、成果発表（ポスター発表）が行われるようになった。高校1年生から高校2年生の夏までの1年半を三つのステージに分けて学習が進められることになった。第1ステージは人間関係トレーニングと位置付けられ協働的な学びの基礎を養った。第2ステージでは、プレ探究活動として、それまでの学びの中間報告を「地域フォーラム」（学校を会場として、探究的な学びの発表を地域に公開、同時に地域の団体（NPO、市民グループ、行政機関など）の発表も行われ、地域の人々と生徒が交流・議論する場となっている）で公開。第3ステージでは探究学習のまとめとして、2年生の夏に行われる最終プレゼンテーションに向けてそれぞれ探究的な学びを深めるといった構造となっている。

【探究学習の展開】 この「総合的な学習の時間」改革と同じころ、A 教諭が指導する科学部において、その後の富田林高校の探究学習を考える上で注目すべき活動が行われている。2014年から科学部では「石川に再びアユを！」（石川は富田林高校に近接して流れている）をテーマに掲げた探究活動を展開した。この活動は、のちに地域の人々も巻き込んだ探究活動に発展しており、また、日本学生科学賞大阪府知事賞を受賞することとなった。こうした科学部の探究活動は、足下の地域に根差した探究活動であり、富田林高校の探究的な学びにとって一つの具体的モデルを示すことになったのではないだろうか。

2015年に富田林高校の中高一貫校化が決定され、2017年4月から、併設型中高一貫校として、富田林中学校・高校となった。それと同時にスーパーサイエンス・ハイスクール（以下、SSH とする）の指定を受けた。SSH の指定も、富田林高校の探究学習を考える上で重要となる。



（図 易 2018 による）

富田林高校のカリキュラムの全体像は、「探究」と「貢献」を基軸（太い幹）に据え、その太い幹から伸びる枝葉のように行事、部活動、クラス、SSH、教科の学習が置かれるようなイメージである。これによりリテラシーからコンピテンシーへの成長を促そうというものである。現在展開されている探究学習では、理系は SSH をベースとした探究が中心となり、文系では地域活性化や地域企業等への提案など地域との結びつきを意識した探究学習が多くなっている。探究学習のなかではプレゼンテーションとディスカッションの機会を多く設けることや、目標と目的を明確化（ビジネスコンクールや各種科学賞への応募）することで、モチベーションを高め、ポテンシャルを発揮できる環境を整えている。現在、本格的に探究学習を中心に据えた学校改革の起点から10年余りを経て、その課題も見えてきている。

4. 大阪府立松原高等学校の探究学習－実践の特長と示唆（和井田祐司）

【学校の沿革・概要】 本校は大阪府松原市にある総合学科高校である。前史には布忍小学校（布小）・松原第三中学校（三中）における人権学習（1967 年～）がある。人権学習に取り組んだ三中生が地元高校育成運動を展開し、「一流でも三流でもない地元でねざした新しいタイプの高校」「布小、三中の教育を受け止める高校」として、1974 年に同校が誕生した。

同校の沿革は、実践上の困難を契機にその都度実践の方向や内容を吟味し、特色ある学校を創造した歩みでもある。開校直後は掲げた理想との乖離があらわになる場面もしばしばあったが、障がいのある同級生の進路保障を要求し自らも同校に進学した三中生を中心に、障がいのある生徒を「準高生」として受け入れ、包摂的な学校づくりへの確信を強めた。1980 年代後半、座学の困難さが顕在化した際には、生徒の生活世界に見合ったカリキュラムの再構築（自由選択講座）が試みられた。この試行は教師集団に、何を教える必要があるか/教えたいのかという問いを生み出し、教師が関係性のなかで学び合う契機になったものの、教師の負担も大きかった。そこで、教員加配による持続可能性の向上への判断もあり、1996 年に同校は大阪府初の総合学科高校へと改編した。2000 年代、授業規律面での困難が生じた際も教師集団はグラウンドデザインの検討を重ね、生徒に育てたい力を追究し授業改善につなげた。現在、同校は信頼（FAITH）を中心に置く 3 つの WA（話：コミュニケーションにより、聴く・話す/和：お互いを思いやる/輪：違いを認めともに生きる感性）により「優しいチカラ」（人を思いやり、自分を鍛え、未来を描く）を育む学校を掲げている。

総合学科原則履修科目に、1 年次：産業社会と人間（産社）、3 年次：課題研究がある。菊地（2025）はこれら科目について、同校の特長をさらに明確にするツールとなっていると評する。以下は、産社と課題研究における生徒の学びの姿に注目しよう。

【「産業社会と人間」「課題研究」における生徒の学びの姿】 産社は週 1 回、2 時間連続授業で実施する。年度前半は学年で同一の内容を学級単位で学び、後半はジャンル（昨年度は 3 ジャンル）に分かれ選択授業形式となる。学習成果発表は 2 月のコンペティション大会であり、4 人 1 組で 15 分間のプレゼンを行う。1 学期の主題は、「『自己理解・他者理解』を深める」。アクティビティを通して自他の価値観の違いや合意形成を学ぶ。学期後半には、ご当地カレーアイデアコンペ（ミニコンペ A）として 4 人 1 組で 2-3 分の発表がある。2 学期の主題は「社会とつながる」。プレゼン力向上を目標にわくわくアイディアコンペ（ミニコンペ B）として、4 人 1 組で 2-3 分の発表を行う。主題は、遅刻をなくそう！/ごみをなくそう！/部活を盛んに！から選ぶ。

10 月からジャンル別学習となる。11 月に外部の専門家を訪ねるリサーチデーがある。訪問先の専門家は、コンペティションで審査員でもある。

筆者はリサーチデー前後のぴあ・アドボカシージャンルの授業（11 月 4・11 日）と、コンペティション（2 月 3 日）を参観した。同ジャンルはリサーチデーに大阪市西成区の A 保育園にて、園長の N 氏らのお話を聞く。11 月 4 日の授業前半は「支えるとはどういうこと」等の問いに向き合い、訪問準備を進めた。後半は「友達ってどういうこと」の問いでブレインストーミングと交流を行った。そこでは自身の経験や葛藤を語り聴きあう姿がみられた。11 日はリサーチデーの振り返りとして、お礼状作成、当日印象に残ったことの班交流、新聞作成の活動を展開した。コンペティションでは各班とも自身の切実な問題に着目・分析し、学校や社会への提案を行った。発表題には「友達との関わり方で悩むのはなんでだろう」「誰もが思い合える社

会を作るには」「松高をみんなの居場所にするためには」等がある。発表時に自己開示する生徒・班も複数あった。紙人形劇や寸劇を導入し、キーワードの紙板書（ツール）も用いる等、各班とも創意工夫を凝らしていた。

課題研究は、全生徒が自ら問いを立て、1年かけて探究する。ジャンルごとに週1回・2時間連続授業を基本に実施する。4章 6000字の論文執筆に加え、1月の課題研究発表会にて1人で15分間の発表を行う。論文構成は授業計画と連動する。1章:はじめに、2章:文献研究は4-6月に行う。なぜそのテーマに取り組むのかを班で語るが、この時に葛藤しながら自己を開示し、涙ながらに発表する生徒もいる（小林 2025）。文献研究では6月に発表の機会がある。3章:フィールドワークは7-9月に行う。調査準備、実施、振り返りを経て発表も行う。4章:まとめは10-11月に行う。論文を執筆・提出する。その後は中間発表を行う。3学期には発表大会に向け、発表ツールを作成し、練習を重ねる。

筆者は1月16日の課題研究発表会で9名の発表を聞いた。各自、経験と探究に根ざした等身大の言葉で研究成果を表現していた。発表は当事者研究（「自分に合ったストレスの向き合い方」等）、人権学習（「障がいを抱えた人々が『偏見』に悩まずに生きるには」等）、社会課題に関する研究（「HIVの誤った認識をなくすために自分たちにできることは」等）に大別できる。共通するのは、第1になぜ自身がその課題に向き合うのかという意味づけが各自の中で明瞭であり、自己理解や生き方と結びついた発表となっていた。第2に人権尊重を基盤とした探究視点が感じられた。

[学習環境の構成・学習指導の工夫] 第1に校外に学びを支えるネットワークがある。産社リサーチデーや課題研究フィールドワーク等、学外者の協力・共同が組み込まれている。生徒は問題に対峙する当事者・専門家から触発され、探究意欲を高める。産社コンペティション審査員を務めたN氏の生徒へのコメントは、生徒の問題意識を社会構造の追究へとひらくものであり、校外の協力者は継続的に生徒の学びに重要な役割を果たしてもいる。産社・課題研究担当教諭は、校外にも射程を拡げながら生徒の学習環境の整備を意識しており、自らが教える以上に、多様な出会いの中で生徒が学び表現する機会を重視している。

第2に、長期的な見通しと明確なねらいをもって学習支援・指導がなされている。産社ではワークショップ形式で対話的に学びつつ、ジャンル学習から社会的問題に接近していく。問いをもとに自身に身近な問題に向き合い、フィールドワークを実施し、提案を考えるとといった一連の活動は、課題研究の活動過程と重なり、産社の経験は課題研究の準備になっている。なお、産社のジャンルは、担当教員がいま目の前にいる生徒に何を伝え/考えてもらいたいかを吟味して設定する。ここからも授業者がねらいを自覚して活動を組織しているとわかる。

第3に、探究目的の吟味である。課題研究で求められるのは、なぜその対象を探究するのか（せずにはいられないのか）、この探究が自身の過去・現在・未来にいかなる意味をもつのか、という問いに生徒自身が真剣に向き合うことにある。探究活動を通した自己理解と生き方づくりに主眼が置かれている。課題研究担当教諭は、生徒に「自分を登場させよう」「私を主語にしよう」と要求する。自らのことばで熱量のある研究発表を行う生徒たちの背景には、自己理解と生き方創造に力点を置いて学習を支援する教師の存在がある。

5. 事例校実践からみえてくるもの（和井田清司）

上述の諸実践は、探究学習の具体的かたちも教育課程中での位置づけも微妙に異なる。

だが、生徒たちが主体的に問いを形成（「問題場面」の成立）し、外部環境に働きかけて探究の試行錯誤をくり返し、自分なりの納得解（「解決場面」）に迫ってゆくスタイルは共通している。ともに、自律的探究学習のかたちが模索されているといえる。

ちがいは、高校がもともと制度や実態において多様であり、その高校の立脚する制度や地域の特色をうまく活用することから生まれている。むしろ、多様な制度を活用することで、実践に思いのほか豊かなバリエーションが生まれ、効果的な展開が可能になっている。そしてどの事例でも、教師側の学習支援の工夫（学習環境の構成、環境との相互作用への働きかけ、支援の質と量）が用意されている点が示唆的である。

[参考・引用文献]

易寿也「大都市周辺部の伝統校が変わる―「総合的な学習の時間」を軸とした「学びの改革」（序論）」大阪芸術大学『芸術と教育』第2号、2018年。

高橋亜希子「探究を中核とした公立C高校の内発的学校改革―現場の声を出発点とした中高一貫校化―」南山大学紀要『アカデミア』人文・自然科学編、第24号、2022年。

平野智之・伊藤あゆ・菊地栄治編著『FAITHの学校―ようこそ松原高校へ』小さ子社、2025年。

菊地（2025）、小林（2025）も同書所載論考。

付記 当日は前半で話題提供を、後半で参加者とのフリートークを予定している。詳細な発表資料は当日会場にて配布する。なお、本報告は、科研基盤C・課題番号25K06180の研究成果の一部である。

ラウンドテーブル2【実践研究委員会企画】

実践の記録を研究論文にしていくために —実践者のための論文の書き方講座—

企画代表者 神永 典郎（白百合女子大学）
コーディネーター 石森 広美（北海道教育大学函館校）

【実践事例紹介】

森 健司（兵庫教育大学大学院博士課程・深谷市立岡部小学校）
手塚 貴子（帝京大学・帝京大学八王子高等学校）

1. 趣 旨

優れた教育実践は、多くの教育研究者および実践者に共有されるべきものです。しかし、それが公開されることなく現場にうずもれていることもあります。学校現場等の実践者から投稿された実践研究論文については、実践内容は意義深いものであっても、論文としての作法や体裁が整っていないために、学会誌へ掲載に至らないケースが多々あります。また、論文化へのハードルが高いために気後れする、あるいは書き方がよくわからないため断念してしまうということも多々あることが推察されます。優れた実践記録を実践研究論文や研究論文等として残し、またその実践の手法や成果を広く学会で共有することは、本学会の発展にとっても極めて重要であると考えます。

そこで、研究実践委員会においては、オンラインにて、研究者・実践者である会員が互いに学び合うことができるよう「オープン実践研究会」を継続的に開催し、実践と研究をつなぎ、優れた実践から共に学び合う機会を設けてきました。さらに、そこで発表された実践者の方々に伴走しながら学会の『年報論文』としてまとめるためのサポートを行ってき参りました。その結果、今年度（2025年度）も「オープン実践研究会」でご発表いただいた実践報告から3本の年報論文が掲載されることになりました。

そこで、本ラウンドテーブルでは、あらためて実践者の方々向けに、論文の書き方講座を企画に、実施することにいたしました。

2. 主 な 内 容

本ラウンドテーブルでは、石森広美会員による「ミニ講座」と、これまでに実践研究論文を投稿し掲載となった経験をお持ちの森健司会員・手塚貴子会員に、実践事例の紹介をしていただき、参加者のみなさんと掲載論文作成に至るまでの研究論文の作成方法等について情報交流して行きたいと考えています。

<ミニ講座>

石森 広美（北海道教育大学函館校）

論文の作法 ～最低限抑えたい事項について～（25分程度）石森委員

<実践事例の紹介>

- ・ 森 健司（兵庫教育大学大学院博士課程・深谷市立岡部小学校）
- ・ 手塚 貴子（帝京大学・帝京大学八王子高等学校）

自分の実践を論文化したいと考える学校現場等の教育実践者向けに、論文の書き方のポイントをお伝えします。

3. タイムテーブル（14:40～16:10）※現在の予定です。

1. 研究実践委員会委員長挨拶（5分）委員長（神永）
2. ミニ講座：論文の作法～最低限抑えたい事項について～（25分程度） 石森委員
3. 説明についての質疑応答（10分）
4. 実践事例の紹介①（15分） 森 委員
5. 実践事例の紹介②（15分） 手塚委員
6. ディスカッション・参加会員との交流（25分）
7. まとめ（5分）

<参考文献>

石森広美(2016)「問題提起－実践者の視点で行う研究」日本学校教育学会編『これからの学校教育を担う教師を目指す』学事出版, pp. 68-75.

石森広美 (2019)『「生きる力」を育むグローバル教育の実践』明石書店

根津朋美(2016)「教育実践をどのようにして研究論文にするか」日本学校教育学会編『これからの学校教育を担う教師を目指す』学事出版, pp. 8

ラウンドテーブル3

「もうちょっとできたかな」という感覚から 幼児教育と小学校教育の接続を考える

松本 圭朗（近畿大学）

1. 趣旨説明

2000年代以降、省察（reflection）が教師の専門性の中核として位置づけられ、そのあり方が議論されてきた。こうしたなかで、省察が「教育実践の改善のための方法」や「経験を成長の糧にする方法」と捉えられ、自身の認識の枠組みや価値基準を問い直すという点が背景に退く場合がみられる。その背景には、省察という概念の理解の難しさをはじめ、様々な理由が考えられるが、省察が教師にとって「重たい／しんどい」行為であることも、その一因であろう。

日々の教育実践は、あの時こうすればよかったな、もうちょっとできたかなという、とりとめもなく流れていく思いとともにある。この感覚は、普段は気に留めることのない、比較的に軽い後悔ともいえる。中島義道は、「自分自身の意図的行為がそれに関与しているという自覚」をもつがゆえに、『『そうしないこともできたはずだ』（他行為可能）という信念』が生まれるとし、この「他行為可能」という信念を後悔と定義している（中島 2009：10-11）。他方で、中島は後悔が非意図的行為にも及ぶと指摘する。その場合、後悔それ自体が事後的に「そうすることもできた」という確信を生みだす（中島 2009：41）。つまり、後悔によって別の選択肢が（さもあったかのように）浮かび上がってくるという。

教育を「他者に対する働きかけ」と捉えるならば、教育という営みは意図的行為であり、その全てが「他行為可能」だといえる。しかし、教師の全ての言動が意図的行為となるわけではない。たまたま目に入らなかったことをはじめとして、何気なく行われている無数の振る舞い、すなわち、非意図的行為が教育実践を支えている。ここに、「もうちょっとできたかな」という感覚の意義が生まれる。「もうちょっとできたかな」という比較的に軽い後悔が、非意図的行為の「そうすることもできた」という思いを事後的に出現させる。

ここで注目したいのは、非意図的行為における他行為可能性が事後に現れる、という点である。教師が「もうちょっとできたかな」と感じるとき、教師はすでに、何が「より良い」のかという暗黙の価値基準を持ち出している。したがって、省察のように価値基準を問い直すところまで踏み込まないにしても、自らの教育実践を相対化し、そこに織り込まれていた判断や価値基準を問い直す可能性へと開かれている。問い直しそのものを引き受けるわけではないからこそ、省察に伴う「重たさ／しんどさ」を免れている。

こうした背景を念頭に置きながら、本ラウンドテーブルでは、幼児教育¹⁾と小学校教育の接続をテーマとして、教師の「もうちょっとできたかな」という感覚のあり方を考えてみたい。現在、幼小接続は政策的に大きな焦点となっている。文部科学省・こども家庭庁の幼児教育ワーキンググループ・保育専門委員会は、2026（令和8）年6月に議論の「取りまとめ（案）」を公表し、『幼稚園教育要領』・『保育所保育指針』・『幼保連携型認定こども園教育・保育要領』の改訂に向けて、三者の円滑な接続を改善の柱の1つに位置づけている。そこでは、「幼保小の架け橋プログラム」を背景に、5歳児から小学校1年生までの2年間を「架け橋期」と捉え、5歳児のカリキュラムと小学校のスタートカリキュラムを通した「架け橋

期のカリキュラム」を、幼児教育施設と小学校が共通の教育的視点に基づき協働して作成することが構想されている。それは、いずれか一方への準備や適応ではなく、「それぞれの専門性を発揮した教育の互恵的な充実」にある。合同の研修や保育・授業の相互参観を通じて互いの教育への理解を図り、幼児教育の側が幼児の姿から遊びの中の「学び」を見取り、「対話のための資料」を用いて小学校関係者と共有することで、遊びを通して育まれた資質・能力と各教科等の学習との「学びのつながり」を意識した実践の改善が目指されている。

そして、この「取りまとめ（案）」では、幼小接続の困難さにも触れられている。小学校の立場からは、各園の教育の質にばらつきを感じる、幼児教育でどのような資質・能力が育まれているのか分からない、幼児教育との学びのつながりが見えない、といった声が課題として挙げられている。他方の幼児教育の立場からは、スタートカリキュラムの取り組みが十分でない、幼児教育が望んでいない指導を求められる、接続の取り組みが交流活動や特別な配慮を要する幼児の引継ぎに終始してしまう、といったことが課題とされている。それぞれの立場から考えると、「見えにくいもの」を可視化し、共有することが重要となる。そして実践の改善によって乗り越えることが、議論のうえでも、実践のうえでも求められている。

こうしたなか、幼小の接続期は、「そうすることもできた」という他行為可能性が立ち現れやすい場である。教師は、子どもがそれまでどのように過ごしてきたのかをよく知らないまま、教育実践を進めなければならない。遊びを通した学びと教科を軸とした学びは、それぞれ独自の時間の流れと子どもの見方をもっており、一方の側からはもう一方の全体が見えにくい。そのため、意図して選んだわけではない振る舞いが多く含まれることになり、「もうちょっとできたかな」という感覚が、はっきりした答えの出ないまま残りやすい。

本ラウンドテーブルでは、登壇者・指定討論者を含めた参加者とともに、自らの教育実践の「失敗」の告白ではなく、「もうちょっとできたかな」という感覚を手がかりとして、幼児教育と小学校教育の接続において何が難しく、何が見えにくかったのかを考えたい²⁾。

2. 報告の概要等

本ラウンドテーブルでは、小学校教員経験者（現職者を含む）と小学校長経験者から、幼児教育と小学校教育との接続を企図した教育実践をめぐる「もうちょっとできたかな」という感覚を、それぞれの立場から語ってもらう。また、それらへの応答を保育園長に行ってもらおう。その後は、参加者からも幼小接続に関する教育実践のなかで残り続けている「もうちょっとできたかな」という感覚を語ってもらえればと思う。具体的な報告内容は、以下の通りである。

（1）幼小接続をめぐる現状：瀬川千裕（大阪樟蔭女子大学・元小学校教員）

幼小の架け橋プログラムやスタートカリキュラムなどの枠組みが整えられたとしても、子どもの生活や遊びの履歴を十分に捉えることはできない。この現状を踏まえ、本ラウンドテーブルの導入として、幼小接続の現状を概観したい。くわえて、現在の議論を照らし返すために、生活綴方教師の今井誉次郎による認識形成の議論——とくに「ことばの中身をふやすこと」に関する議論——を紹介する（今井 1977：182-185）。これらによって、次の議論に繋げたい。

（2）小学校での教育実践：小里直通（東京家政大学・元小学校教員）

元小学校教員として、自らが行った教育実践を振り返ってみたい。当時は「うまくいった」、「問題はなかった」と感じていても、時間を経て振り返るとき、「もうちょっとできたかな」と感じることもある。

私は国語の物語文の導入の場面と、算数のかけ算の場面を取り上げたい。当時、私は国語の導入では音読をするものだと考えており、丸読みや斉読をしていた。また、算数のかけ算九九は覚えて当たり前だからとりあえず暗記させないといけないと思い、覚えるように唱える指導をただ続けていた。しかし、今から振り返ると私のなかで「～せねばならない」という教科指導の固定観念に縛られていた。結果として授業は進み、特に困ったことはないよう

に思っていたが、保育者養成校で幼小接続を研究していると、読み聞かせや紙芝居で物語の世界に没入できるようにする点や、操作的な活動や生活に近いストーリー性のある学習問題を設定する点で、学習者視点に立った学びをつくりあげることが「もうちょっとできたかな」と感じている。

（３）小学校での教育実践：北井裕紀（公立小学校教員）

現職の小学校教員として、今まさに進行している幼小接続期の教育実践を語ってみたい。声のかけ方や、たまたま気づけなかったことなど、その場の振る舞いのなかには、結果が悪くなくとも残り続ける「もうちょっとできたかな」という感覚がある。

今、私が抱えているのは、理想と現実のギャップである。小学校に入学したての子どもは、幼児教育で培われてきた想像力や好奇心に長けていると感じる。しかし、学校教育という枠に入った児童は、少なからず学習指導要領に基づき、確実に身につけなければいけない内容が生まれる。子どもが考え、行動し、再考するというサイクルに寄り添う時間がなく、学習内容を身につけさせることに重点を置いてしまう場面があった。授業の中で生まれる純粋な子どもの疑問——「じゃあ、これはどうなる？」——に耳を傾け、実際に試行することなく、こちらから、用意している答えを渡してしまうことがあった。幼児教育のように子どもの疑問や好奇心を出発点に、それを発展させる学びがどんどん失われていっているのではないかという思いが、答えの出ないまま残っている。

（４）管理職としての実践：海部広明（大阪樟蔭女子大学・元小学校長）

元小学校長として、幼小接続だけではなく、中学校教育との接続も含めた学びのあり方を支えるために、教室の外側から環境や仕組みを整える管理職の役割について振り返ってみたい。

管理職としての私は、幼小中の接続を具体化する柱の１つとして、道徳教育の推進に取り組んだ。幼小中の教職員が互いの教育観や子どもの育ちを共有し、目指す子ども像の実現に向けて協働することをねらいとした取り組みであった。しかし、教職員一人ひとりの実践を支える環境づくりには課題も残った。今、振り返れば、幼稚園での豊かな言葉との出会いを支える読み聞かせの充実、小・中学校での道徳授業づくりの活性化など、さらに取り組めたことがあったと感じている。特に、教員一人ひとりの「もうちょっと」という思いに寄り添いながら、校区全体で子どもの育ちを支える取り組みをもっと充実させたかった。

（５）指定討論——幼児教育の立場からの応答——：西本佐代子（私立保育園長）

私立保育園長として、子どもを送り出す幼児教育の立場から、３名の報告に応答する。すなわち、幼小接続を一方向の「就学準備」と捉える枠組みそのものを問い直しつつ、登壇者・参加者への問いを投げかけ、後半の討議へとつなぎたい。これまでの経験のなかで、保育園が求める卒園時の姿と、小学校が求める入学時の姿との差異に戸惑うのは、何よりも子どもであると感じている。そのため、幼小の間で子ども像の理解を図る必要はあるが、しかし、保育園は独自の目的（目指すべき姿）を有する場である。したがって、保育園（幼児教育）は小学校のための「準備施設」ではないという立場から議論に注目したい。

【注】

- 1) ここでは幼稚園、保育園、こども園を含む広範な場での実践を幼児教育として捉える。したがって、本ラウンドテーブルで幼小接続というときは、幼児教育と小学校教育との接続を意味し、幼稚園と小学校との接続だけを意味するものではない。
- 2) 本ラウンドテーブルでは「もうちょっとできたかな」という感覚と失敗とを異なるものとして区別する。失敗は自他ともに「うまくいかなかった」と判断できる行為の結果であり、原因の特定と修正によって対処可能なものである。失敗も省察の起点となり得るが、それは「何が間違っていたか」、「次はどうするか」という改善志向の問いを呼び起こしやすい。これに対して「もうちょっとできたかな」という感覚は、行為の結果とは

切り離された感覚である。他者から見れば「問題のない実践」であっても、自身が「うまくいった」と感じた実践に対しても生じうるものである。むしろ、子どもや実践に切実に関わっていた教師であればこそ、結果の良し悪しを超えて湧き上がってくる感覚であろう。

【引用文献】

今井誉次郎（1977）『今井誉次郎著作集 第4巻（国語教育論）』合同出版。

中央教育審議会初等中等教育分科会教育課程部会幼児教育ワーキンググループ・こども家庭審議会幼児期までのこどもの育ち部会保育専門委員会（2026）「幼児教育ワーキンググループ・保育専門委員会 取りまとめ（案）」（令和8年6月5日）。

https://www.cfa.go.jp/councils/shingikai/hoiku_senmon/10 （2026年6月19日閲覧）

中島義道（2009）『後悔と自責の哲学』河出書房新社。

【付記】

本ラウンドテーブルにおける瀬川の報告の一部は、JSPS 科研費 25K23287 の助成を受けたものである。また、小里の報告の一部は、東京家政大学ヒューマンライフ支援機構プロジェクト研究助成費の助成を受けたものである。

ラウンドテーブル4【国際交流委員会企画】

学校教育学会における国際交流の可能性

黒田 友紀（日本大学）

林 明煌（台湾・国立嘉義大学）

飯窪 真也（国立教育政策研究所）

1. 企画趣旨

近年、個人や各学会において「教育研究の国際化」が進められており、国際的なシンポジウムや研究会の開催、個人研究として国際的なテーマを扱う地域研究や比較研究の実施、またそれらの研究成果の報告・共有が行われている。本学会においても、海外スタディツアーが継続的に実施されてきた実績がある。

一方で、学会としての「国際交流」についてはどうだろうか。より多くの学会員が国際交流に関わるために、学校教育学会としてどのような国際交流のニーズと在り方があるのかを、参加者とともに考えたい。

2. 学校教育学会としての国際交流の可能性

黒田 友紀（日本大学）

学校教育に関する研究は、どの国・地域においても多くの実践と教育研究が行われている領域であり、世界に共通するさまざまな課題や構造、その地域固有の文脈や特殊性を検討することができる領域である。同じ言葉で表されている事象であっても、その意味や解釈には共通性と多様性がみられるだろう。これまでも、特定の国・地域の事例を制度や実践の面から検討する各国研究は進められてきたが、言語の壁もあり、国内の一部の研究領域や発表にとどまっているものもある。たとえば、日本では明治時代以降の歴史をもつ「授業研究」や「校内研修」に関する実践と研究は、言語の問題等もあって国内を中心に進められてきた。しかし近年、日本の授業研究をモデルとした実践と研究が、世界のさまざまな国・地域で展開されている。また、日本の教育、特に特別活動の海外展開も行われている。本学会は、研究者、教育行政に関わる会員、学校管理職、そして教師といった実践者が多く参加している学会であることから、その強みを生かし、授業研究、校内研究、特別活動といった切り口から実践を検討し、報告することも考えられる。

さまざまな立場の会員が、日本の課題を研究する場合であっても、世界的に共通する課題を研究する場合であっても、国際的な視点や相対的に捉える視点をもって検討を行うことが重要であろう。そのために、どのようにアプローチすればより多くの会員が交流していくことができるのかを考えたい。

3. 海外の研究者・会員からの国際交流

林明煌（国立嘉義大学）

『台湾小中学校国際教育白書 1.0』（2012）によると、国際教育とは、教育を通してグローバルな視点と異文化理解力を養うプロセスを指す。その核心的な目的は、外国語を学ぶことだけでなく、学生が多文化主義を理解し、国連の持続可能な開発

目標（SDGs）などの地球規模の課題を把握し、世界のさまざまな地域で生活し、働き、コミュニケーションをとる能力を身につけることにある。2011 年から展開されてきた台湾小中学校の国際教育は、「カリキュラム開発と授業実践」「国際交流」「教職専門性」「学校国際化」という四つの側面から推進されている。しかし、開始から 8 年が経ち、ナショナル・アイデンティティの欠如、国際交流に関する情報の不足とパートナー探しの難しさ、国際教育を担当する教員の不足、学校国際化に関する地方教育機関による段階的な指導の不足などの課題が見つかった。それらの課題を解決するため、2020 年 5 月に公布された『台湾小中学校国際教育白書 2.0』では、「経費・人材・地域などのリソースの再統合」「小中学校国際教育情報ネットワークの構築と維持」「国際教育評価基準の構成と実施およびカウンセリング」「中央レベルと地方レベルの国際教育推進チームの設立」などの方策が実施されている。このような台湾の状況は、日本の国際教育にも示唆を与えられと考えられる。上記の台湾の状況を踏まえ、本学会での国際交流について考えたい。

4. ディスカッション：学校教育学会としての国際交流のニーズと在り方について

本学会における国際交流について一緒に考えたいという会員にお集まりいただき、ざっくばらんにアイデアを共有していただければ幸いである。

企 画：国際交流委員会

司 会：飯窪 真也（国立教育政策研究所）

報 告：黒田 友紀（日本大学）

林 明煌（台湾・国立嘉義大学）

ラウンドテーブル5

WWL 拠点校におけるカリキュラム開発 —実装を通じた持続可能な教育変革に向けて—

Curriculum Development in a WWL Hub School: Toward Sustainable Educational Transformation through Practical Implementation

服部孝彦（大妻女子大学）

水澤孝順（大妻中野中学校・高等学校）

1. 研究の背景と目的

本ラウンドテーブルでは、WWL（World-Wide Learning）コンソーシアム構築支援事業の拠点校におけるカリキュラム開発の実践を報告し、実践を通じた持続可能な教育変革の在り方について検討する。グローバル化の進展や知識基盤社会の深化に伴い、学校教育には知識の習得にとどまらず、課題発見・解決能力、批判的思考力、協働的学習能力といった高次の資質・能力の育成が求められている。こうした要請に応えるためには、教科ごとの知識伝達型の授業を超え、学習内容の統合と活用を志向した教育課程の再編成が不可欠である。WWL 拠点校は、教科横断的かつ探究的な学びを中核に据えたカリキュラム開発を推進し、その先導的役割を担っている。本ラウンドテーブルの目的は、具体的実践の共有を通して、持続可能な教育変革を実現するためのカリキュラム開発の方向性と条件を明らかにすることである。さらに、実践の理論的基盤についても整理し、教育実践研究としての意義を明確化することを目指す。

2. カリキュラム開発の枠組み

対象となる WWL 拠点校では、「転移可能な思考力の育成」を中核的な教育目標として位置づけ、教科における学習と探究活動とを有機的に接続するカリキュラム設計が行われている。ここでいう転移可能な思考力とは、特定の文脈で習得した知識や技能を新たな状況に適用し、再構成する能力を指す。この能力の育成を図るため、各教科における学習内容を単独で完結させるのではなく、教科横断的な課題解決の文脈に位置づけ直す設計がなされている。具体的には、基礎的知識・技能の習得段階から、それらを活用した分析・考察、さらには発信へと至る段階的な学習プロセスが体系化されている。また、探究活動は単発的なイベントとしてではなく、年間を通じた連続的な学習経験として構造化されており、学習の深化と累積が意図されている。

3. 実践の具体的展開

実践においては、年間を通じて探究プロジェクトが設定され、生徒が自ら課題を設定し、情報収集、分析、考察、発表に至る一連のプロセスを経験する機会が確保されている。これらの活動は、特定の教科に閉じることなく、複数教科の教員による協働的な設計・運営のもとで実施されている点に特徴がある。これにより、学習内容の断片化を防ぎ、知識の統合的理解と応用力の育成が図られている。さらに、英語による発信活動を取り入れることで、学習成果を国際的文脈で表現する機会が提供され、言語運用能力とともに異文化理解の深化も促されている。加えて、評価においてはルーブリック等を活用し、思考過程や探究の質を多

面的に把握する試みも行われている。このような一連の実践は、知識の活用と再構成を中核とする学習観に基づいて展開されている。

4. 持続可能なカリキュラム開発に向けた組織的取組

カリキュラム開発を一過性の取組にとどめず、持続可能なものとするためには、組織的な支援体制の構築が不可欠である。対象校では、定期的な授業研究会やカリキュラム検討会を通じて、教員間の協働的省察が促進されている。これにより、各実践の成果と課題が共有され、継続的な改善サイクルが形成されている。また、外部有識者との連携や他校とのネットワーク形成を通じて、実践の客観的評価と新たな知見の導入が図られている。このような取組は、個々の教員の力量に依存するのではなく、組織としてカリキュラムを開発・改善し続ける基盤を構築する上で重要な役割を果たしている。

5. 論点と今後の展望

以上の実践を踏まえ、本ラウンドテーブルでは、(1) 探究的学習を中核としたカリキュラム開発の課題と可能性、(2) 教科横断的な学びを実現するための組織的条件、(3) 持続可能な教育変革を支える実践の在り方、の三点を中心に議論を深める。特に、実践を個別事例として提示するにとどまらず、他校においても応用可能な知見として整理・共有することを重視する。また、WWL 拠点校における取組が、今後の教育課程改革にどのような示唆を与え得るのかについても検討を行う。本ラウンドテーブルを通じて、実践に根ざした教育変革の具体像を明らかにするとともに、その持続可能性を支える条件について多角的に考察することを目指す。さらに、参加者間の相互交流を通じて、新たな実践的知見の創出につなげることも期待される。

タイムテーブル

- ・ 文部科学省 WWL 事業の趣旨と概要：服部孝彦（大妻女子大学名誉教授、東京大学大学院講師、文科省 WWL 企画評価会議委員）[10 分]
 - ・ 話題提供：水澤孝順（大妻中野中学校・高等学校教頭、WWL 担当）[40 分]
 - ・ 説明についての質疑応答 [10 分]
 - ・ ディスカッション [25 分]
 - ・ まとめ [5 分]
- （「趣旨と概要」の説明は英語、「話題提供」他は日本語となります。）

【富山国際大学呉羽キャンパス E406 教室】

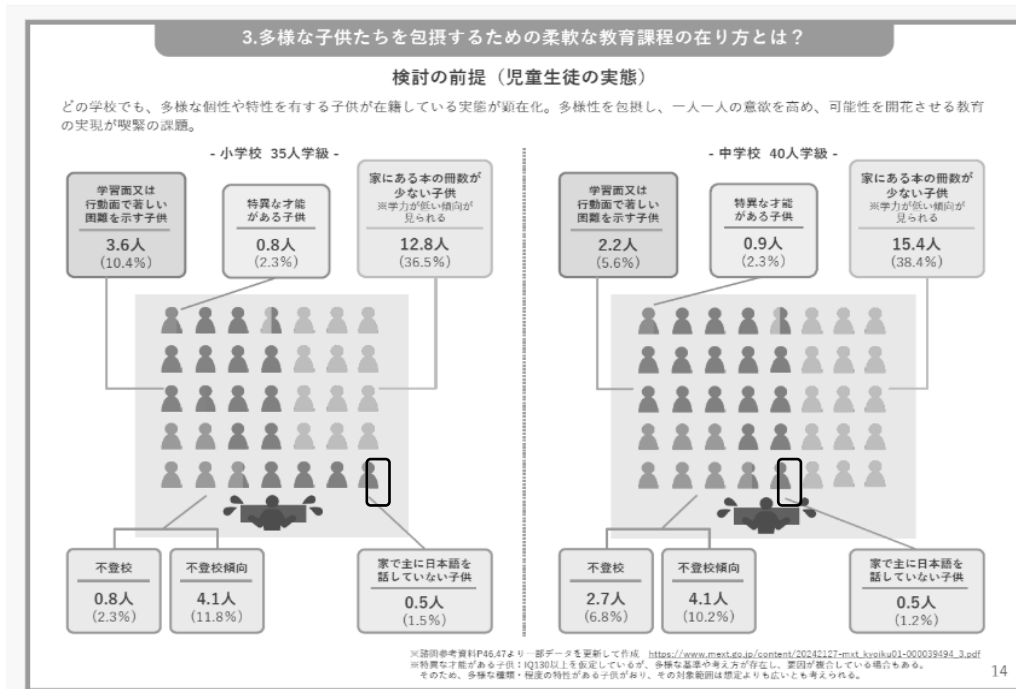
ラウンドテーブル6

日本語指導が必要な児童生徒の視点からとらえ直す 多様な子どもたちを包摂し、自信と意欲につなげる教科授業のあり方とは？

藤井 祥宏（東京学芸大学／株式会社Gakken）

野呂 朱理（株式会社Gakken）

1. はじめに：教室にいる子どもたちをながめてみましょう。

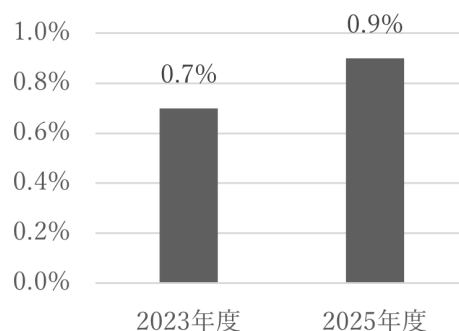


出典：文部科学省「教育課程企画特別部会 論点整理（ポイント：詳細版）2025年9月25日

- 日本語指導の必要な児童生徒は、全国に84,759人（2025年度）。2023年の69,123人から増加した。
- 少子化の影響により児童生徒そのものは減っているが、日本語指導が必要な児童生徒数は増えている。全児童生徒に対する日本語指導が必要な児童生徒数は0.9%（2025年度）。

出典：文部科学省「令和7年度日本語指導が必要な児童生徒の受入状況等に関する調査結果について」2026年5月、文部科学省「令和5年度日本語指導が必要な児童生徒の受入状況等に関する調査結果について」2024年8月、文部科学省「令和5年度学校基本調査」2025年12月26日、文部科学省「令和7年度学校基本調査」2023年12月26日より作成

日本語指導が必要な 児童生徒数の割合 （公立小・中学校）



2. 背景 01：日本語指導の必要な児童生徒に関する数字をながめてみましょう。



出典：文部科学省「令和7年度日本語指導が必要な児童生徒の受入状況等に関する調査結果について」2026年5月より作成

①～③は公立の小学校、中学校、高校、義務教育学校、中等教育学校、特別支援学校。

④は公立、私立、国立の小学校、中学校、高校、義務教育学校、中等教育学校、特別支援学校。

- ・ 2016年度→2025年度の9年で約2倍に。都道府県別にみてもほとんどの都道府県で増加傾向にある。
- ・ 日本語指導が必要な児童生徒が在籍している学校のうち、約70%の学校が5人に満たない少人数のみの在籍。少人数の子どもに対する支援が求められる現状にある。

3. 背景 02：日本語指導が必要な生徒の卒業後の進路は？

中学生等（2024 年度卒業者）

	進学率	就職率	進学も就職もしていない者の割合
日本語指導が必要な中学生等	91.5%	1.9%	4.2%
全中学生等	98.9%	0.2%	0.9%

高校生等（2024 年度卒業者）

	進学率	就職者における非正規就職率	進学も就職もしていない者の割合
日本語指導が必要な高校生等	41.2%	49.6%	13.0%
全高校生等	75.0%	6.5%	6.8%

高校生等中途退学率（2023 年度）

	中途退学率
日本語指導が必要な高校生等	8.5%
全高校生等	1.1%

- 日本語指導が必要な生徒の進学率は、全生徒に比べ、低い。

出典：文部科学省「令和 7 年度日本語指導が必要な児童生徒の受入状況等に関する調査結果について」2026 年 5 月、文部科学省「令和 5 年度日本語指導が必要な児童生徒の受入状況等に関する調査結果について」2024 年 8 月

- 日本語指導が必要な高校生等が高校卒業後に就職する際、非正規就職率が高い。
- 日本語指導が必要な高校生等の中途退学率は全高校等に比べて高い。ただし、令和 5 年度からは改善している（2025 年度：6.4%）。
- 日本語指導が必要な生徒の中学・高校卒業後に進学も就職もしていない者の割合が、全生徒に比べ、高い。

4. 背景 03：進学率・就職率の低さの原因はどこにあるのでしょうか？

【ベトナムから来たミンさん（仮名）のストーリー】

ベトナムから 9 歳で来日したミンさんは、明るい性格で日常会話はすぐに上達しました。しかし、国語の漢字や算数の文章題といった授業の「難しい日本語」が理解できず、学習の遅れを抱えたまま進級していきます。

中学、定時制高校と進むにつれ、授業にはまったくついていけなくなりました。両親は夜遅くまで共働きで勉強を教えられず、経済的な理由から塾にも通えません。ミンさんは家計を助けるため深夜までアルバイトに明け暮れ、日本の進路情報を調べる時間も、相談できる大人も身近にいないまま高校 3 年生の秋を迎えました。

「日本で正社員として働きたい」と願ったミンさんですが、日本の高校生特有の複雑な就活システムをよく知らないまま選考に臨むことになります。さらに、採用面接が決定的な壁となりました。アルバイトの接客会話は得意でも、「企業の理念への共感」や「自分の強みがどう貢献できるか」といった、抽象的で高度な日本語の質問に対し、自分の考えをうまく言語化できなかったのです。

適切なサポートを受けられなかったミンさんは、どこの企業からも内定を得られずに卒業しました。現在は正社員になる夢を諦め、親と同じ工場の派遣労働やアルバイトを掛け持ちしながら、その日暮らしの不安定な生活を送っています。

**5. あなたの教室にいる日本語指導の必要な児童生徒の背景についてどこまでどのよう
に理解していますか？**

【日本語指導の必要な児童生徒について考えるときのキーワード】

母語について：母語は何語？ 家庭では何語を使って話す？ 母語の習得状況は？

来日歴：日本生まれ／未就学児で来日／小学校低学年で来日／……

就学歴：ほかの国で学校に通っていた？ 日本の学校にいつから通っている？

日本語の習得状況：話す・聞く／書く・読む、サバイバル日本語、友達、教室／外

教科の学習状況：ほかの国で学習済みの単元は？ どの教科が得意／苦手？

6. 算数科の授業を日本語指導が必要な児童生徒の視点で話し合しましょう。

★はじめに…今回の単元の目標は何でしょうか。算数科と日本語について確認してください。

【①ことばと算数のレディネス】

- ・ どんな算数特有のことばがありますか。
- ・ この問題文のどこで、児童は最初につまずきそうでしょうか。
- ・ 日本語の理解が十分でなくても、図・具体物・操作で参加できる部分はありますか。
- ・ 計算ができないことと、文章題の意味がつかめないことは、同じ困難でしょうか、別の困難でしょうか。

【②実際の学習支援方法の検討】

- ・ 文章題において、立式の前の、問題場面を理解するためにどんな支援を入れますか。
- ・ 児童の生活経験を手がかりにできる部分はありますか。
- ・ 日本語が母語の児童とのペアやグループ活動を取り入れることはできそうでしょうか。

**7. あなたのご専門の教科やほかの教科・活動を、日本語指導が必要な児童生徒の視
点で話し合しましょう。**

日本語指導が必要な児童生徒がいる教室で、多様な子どもたちを包摂し、自信と意欲につなげる授業を実現するには、どのような工夫が必要でしょうか。あなたのご専門の教科やほかの教科・活動について、ぜひ共有してください。

監修：池上摩希子（早稲田大学大学院日本語教育研究科 教授）

参考資料：『日本語と教科の統合学習シリーズ 日本語のサポートが必要な J S L 児童のための算数科授業づくり 2 2』池上摩希子, 2026 年, Gakken

支援ニーズを抱える子どもと向き合う教師の「判断」

—エスノグラフィーでよみとく教師の専門性

●小田郁予 著

定価4,400円

「学校」の何気ない日常を支えている教師たちの日々の実践や、教師たちの「先生」としての判断を探究したエスノグラフィー。



多様な「学ぶ」が生まれる「学校」

—こども一人ひとりがいきる包摂のかたち

●加瀬 進 監修

入江優子・箱山智美・田嶋大樹 編著 定価2,420円

不登校支援という枠を越え、すべての子どもの多様な「学ぶ」をいかに保障するかという視点から、学校の可能性包摂性を見つめ直す。



探究学習×教育DX時代の学校改革

—かすみがうら市発 ミライを創る小中一貫9年教育

●かすみがうら市教育委員会 監修

打越正貴・佐藤環・今泉友里・宮本浩紀 編著 定価2,420円

子どもたちの「よりよい学び」を実現するための視点や実践のヒントを提供。



日本のフリースクールと台湾の実験教育

●王 美玲 著

定価2,090円

日本と台湾における不登校問題と現状を比較し、教育制度改革の動向を分析。



ユネスコ・教育を再考する

—グローバル時代の参照軸

●日本教師教育学会第10期国際研究交流部・

百合田真樹人・矢野博之 編訳著/他訳著 定価2,200円

待望の翻訳。ユネスコの教育政策と実践の基盤議論を読み解く。

SDGsと学校教育

総合的な学習／探究の時間とESD

—持続可能な社会の創り手を育む

●小玉敏也・金馬国晴・岩本 泰 編著 定価2,640円

「総合的な学習／探究の時間」授業実践の最前線を、多彩でリアルな学校現場での事例と、探究の方法論の両面から紹介。



方南小学校「学校支援本部活動」15年の軌跡と挑戦

—学びと豊かな心を育む地域の力

●末吉雄二 編著

定価1,870円

子どもの人生に大きな影響を与える非認知能力はいかに育つか。保護者や地域たちの支えで、豊かな教育を紡いだ実践録。



遊びの力で学校を変える

—ワクワクがあふれる休み時間のつくり方

●マイケル・フォレット 著/IPA日本支部 監訳 定価2,530円

「子どもの遊ぶ権利の推進」を実践として形にしていこうガイドブック。



カラフルな学校づくり

—ESD実践と校長マインド

●住田昌治 著

定価1,980円

元気な学校は元気な教職員から!! 染みわたる等身大の学校変容。



教育裁判事例集

—裁判が投げかける学校経営・教育行政へのメッセージ

●佐々木幸寿 著

定価2,750円

学校運営教育行政にまつわる裁判事例を読み解く。61の裁判事例を紹介。

〒153-0064 東京都目黒区下目黒3-6-1
http://www.gakubunsha.com

学文社

Tel 03-3715-1501(代) Fax 03-3715-2012
E-mail: cigyo@gakubunsha.com

初等社会科教育の理論と実践

—学びのレリバンスを求めて—

編著 原田 智仁 体裁 B5判・192頁 カラー口絵付
ISBN 978-4-909378-52-1 定価 2,090円(税込)

社会科教育のルネサンス

—実践知を求めて— [第3版]

編著 原田 智仁 体裁 B5判・184頁
ISBN 978-4-909378-56-9 定価 2,497円(税込)

哲学的な考えをいかす新・教育原理

—教育と保育を考える—

編著 伊藤 潔志 体裁 B5判・176頁 カラー口絵付
ISBN 978-4-909378-71-2 定価 2,310円(税込)

授業のための新・「教職」道徳教育論

編著 金光 靖樹 体裁 A5判・192頁 カラー口絵付
ISBN 978-4-909378-46-0 定価 2,000円(税込)

自ら学ぶ道徳教育

編著 押谷 由夫 体裁 B5判・192頁
ISBN 978-4-909378-40-8 定価 2,619円(税込)

マンガと事例でポイントをつかむ幼児教育・保育方法論

編著 開 仁志 体裁 B5判・176頁 カラー口絵付
ISBN 978-4-909378-72-9 定価 2,310円(税込)

教職を学ぶ人の新・教育心理学

編著 渡部 雅之 体裁 A5判・168頁 カラー口絵付
ISBN 978-4-909378-47-7 定価 2,000円(税込)



図書出版・販売
教育情報出版

〒557-0055 大阪市西成区千本南1-18-24
TEL 06-6658-8741(代)
06-6651-5012(編集部)
FAX 06-6652-2928

ホームページはこちらからご覧いただけます。

http://www.kyoiku-joho.jp ▶▶▶



<日本学校教育学会第40回研究大会（富山国際大学）プログラム>

発 行 日：2026年7月3日

発行・編集：日本学校教育学会第40回研究大会（富山国際大学）準備委員会

<準備委員会>

委員長	湯澤 卓	（富山国際大学）	yuzawa@tuins.ac.jp
副委員長	蜂須賀洋一	（上越教育大学）	
	萩中 泰弘	（富山国際大学）	
委員	岩崎 直哉	（富山国際大学）	
	岡田 了祐	（富山大学）	
	奥泉 敦司	（金沢学院大学）	
	金子 泰子	（富山国際大学）	
	木下 豪	（富山大学）	
	玉村 恭	（上越教育大学）	
	辻村 貴洋	（上越教育大学）	
	秦 さやか	（金沢学院大学）	
	松山 友之	（富山国際大学）	
	三原 茂	（富山国際大学）	

- 大会への参加、自由研究発表等に関することについての問合せ

【大会準備委員会事務局】

日本学校教育学会第40回研究大会準備委員会事務局（委員長：湯澤 卓）

〒930-0196 富山県富山市願海寺水口444 富山国際大学呉羽キャンパス

TEL：076-464-6499（湯澤研究室直通）

E-mail：jase40th2026@gmail.com

- 入会等に関する問合せ

【日本学校教育学会事務局】

日本大学文理学部教育学科（〒156-8550 東京都世田谷区桜上水3-25-40）

TEL：03-5317-9370（事務局 田中謙研究室直通）

E-mail：JASE.officialmail@gmail.com



日本学校教育学会 HP



富山国際大学



パレプラン高志会館